

# Architecture Bulletin

296

2023 夏号

## 強・用・美の進化 「強」を考える

Meaningful Garden 第1回

海外レポート

サステナブル時代の豊かさとは 第1回

弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第5回

良質な建築、これからのまちづくり

大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第1回

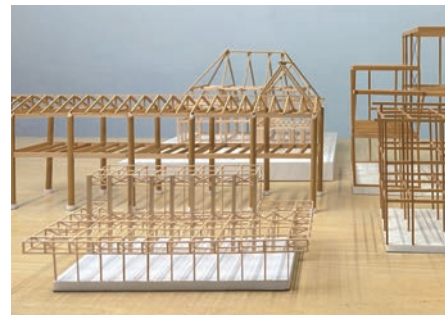
卒業設計をふりかえる

第34回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2023

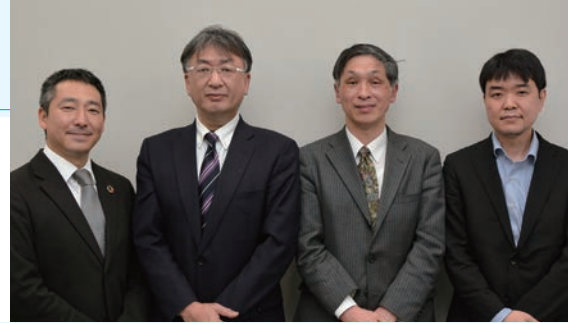
温故知新

活動報告

学生の会 @joint活動報告



# 意匠と機能を兼ね備えた 「デザインング・メタル」を展開



左から 日本製鉄(株) 薄板事業部 浜崎由基氏、  
日本製鉄(株) 薄板事業部 松田修二氏、  
日鉄ステンレスアート(株) 営業部 石丸好和氏、  
日本製鉄(株) チタン事業部 清水健太郎氏

日本製鉄グループは、薄板(鉄板)、ステンレス、チタンに意匠性や機能性を付与した商品を開発・製造しています。これら意匠系商品を「デザインング・メタル」とし、建築物やプロダクト向けの商品として展開。3品種が事業連携しながらそれぞれの金属の特性や質感を紹介することで、用途やニーズに合わせて素材を選択できるよう、建築家やプロダクトデザイナーに向けて発信しています。

## カーボンニュートラル実現に向けて

当社は、薄板(鉄)、ステンレス、チタンの意匠系商品群を「デザインング・メタル」と名付け、それぞれの鋼材の特性や魅力をお伝えしています。目的や用途、予算に合わせて使い分けいただけるように寿命や価格などの情報をわかりやすく発信しています。

鉄鋼業界は2050年までにCO<sub>2</sub>排出量をゼロにすることを掲げています。一般的な鉄の製造には、1トンあたり約2トンのCO<sub>2</sub>が排出され、業界はこの抑制に取り組んでいます。加工後の塗装工程でも鉄をつくるのに匹敵するCO<sub>2</sub>が発生します。「デザインング・メタル」はあらかじめ色彩や表面加工を施した鋼材のため、後工程での塗装を省き、環境面でも優れています。

## 鉄の風合いを実現した意匠性鋼板

2020年にリリースした「FeLuce」<sup>フェルルーチェ</sup>は、めっき層にヘアライン調の加工を施した電気めっき鋼板です。素材の表面に塗料やフィルムを付加する従来の手法と異なり、めっき層に直接加工を施すことで金属本来の風合いを実現。その上に指紋を目立ちにくくする新規開発の薄膜樹脂コートを塗布。加工性にも優れています。ブラックとシルバーの2色で、業務用ランドリー機器などスタイリッシュな電化製品や、内装パネルにも採用されています。

また、黒色めっき鋼板「黒ZAM」<sup>ザム</sup>は、スケルトン天井の電路支持材など内装用建材として活用されています。



意匠性の高い薄板、ステンレス、チタンを「デザインング・メタル」として展開

## 高級感あるステンレス意匠鋼板

グループ会社の日鉄ステンレスアート(旧月星アート工業)は、ステンレス鋼板に表面仕上げ、色彩コーティング、機能性コーティングを施したステンレス意匠鋼板を製造・販売。色彩、光沢、テクスチャー、機能を組み合わせた多種多様な商品を取り揃え、国内メーカーのエレベーター昇降機では高いシェアを誇っています。

ステンレス意匠鋼板は長寿命で高級感があり、デザイン性の求められる建物の内装材などに採用されています。ステンレスの清潔さを活かして、キッチンキャビネットや店舗・住設機器などにも採用されています。

## 軽くて強い鮮やかな意匠性チタン

チタンはこれまで軽い・強い・錆びにくいという特性から航空機など工業製品で活用されていました。そこに意

匠性を付与し、建築材料として使っただけの商品「TranTixxii」<sup>トランティクシー</sup>を開発。表面皮膜をナノレベルで制御し、素材そのものが放つ多彩な色をつくり出し、テクスチャーと合わせて1,000種類超の表現を実現します。塗装ではないため紫外線による劣化もなく、建築物の美観の長期保持に貢献します。

また、チタンは高耐久でありながら比重は鉄やステンレスの約半分のため、屋根材に使用することで軽量化と耐震性向上にも寄与。増上寺大殿の屋根瓦葺き替えでは厚さ0.3mmの「TranTixxii」を屋根瓦に採用いただきました。欧州のレッド・ドット・デザイン賞と日本のグッドデザイン賞も受賞している商品です。

鉄、ステンレス、チタン、3品種それぞれの特性を理解していただき、カーボンニュートラル社会の実現に向けて皆さんと一緒に前に進んでいきます。

## NIPPON STEEL 日本製鉄株式会社

<https://www.nipponsteel.com/>

製鉄業を中心に、エンジニアリング、ケミカル・マテリアル、システムソリューションの4つの事業を推進。

薄板事業部 東京都千代田区丸の内2-6-1 TEL:03-6867-5307  
チタン事業部 東京都千代田区丸の内2-6-1 TEL:03-6867-3948  
日鉄ステンレスアート 兵庫県尼崎市次屋2-2-24 TEL:06-6499-1188

デザインング・メタルHP ↑



## 目次

## ● 特集

## 4 強・用・美の進化

## 「強」を考える

- 4 動的な強さを探す —建築が「保たれる」ために— 伊藤暁建築設計事務所／東洋大学 伊藤 暁
- 6 両義的な躯体の姿 —不明瞭ながら明瞭で一体的ながら接合的なフレーム— リライト\_D／日本大学 古澤大輔
- 8 時間軸における美の継承という強 —熊本の2プロジェクトを題材に— 日建設計 杉山俊一、基内有紀
- 10 2023年度特集テーマ「強・用・美の進化」プロローグ 佐久間達也空間計画所 佐久間達也

## ● コラム

- 11 Meaningful Garden ～意味に満ちた庭～ 第1回 景観論から建築設計の世界へ アイダアトリエ 会田友朗
- 12 海外レポート ロサンゼルス —2026ワールドカップ・2028オリンピックに向けて—  
ゲーリー・パートナーズ チアヤヤスノリ
- 14 サステナブル時代の豊かさとは —フェアウッドと地域材で未来を切り開く— 第1回 SDGsとフェアウッド  
ワイス・ワイス 佐藤岳利
- 16 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第5回 建築士の予算管理義務 山崎哲法律事務所 安藤 亮
- 17 良質な建築、これからのまちづくり 里山資本主義を生かした建築まちづくりはできるか アトリエ24 飯沼竹一
- 18 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第1回 当事者に聞く コンペの企画から完成まで  
大井町駅前コンペの記憶 ウィスト建築設計 藤沼 傑  
品川区／JIA城南地域会 座談会 前編 JIAからの打診でコンペ始動
- 20 卒業設計をふりかえる タマビケンチュウ 中村高淑建築設計事務所 中村高淑
- 21 コラム 「吠える」ことの重さ HASAS 左 知子

## ● ひろば

- 22 第34回 JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2023 地域の中の建築家～小さな物語のはじまり  
コンテンツラリース 柳澤 潤／アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所 田井幹夫／伊藤立平建築設計事務所 伊藤立平／  
ピークスタジオ一級建築士事務所 佐屋香織／洋建築企画 清水智津子／田邊雄之建築設計事務所 田邊雄之
- 25 温故知新 先達に学ぶ 思考の空間に跳ぶ 大山市建築設計 大山早嗣
- 26 抱負を語る 必要とされる建築、必要とされない建築家 ゼロ・アーキテクトプラスコンサルティング 松本秀樹  
抱負を語る 滑走から飛翔へ ヘイソン・カナイダーアーキテクト 田村克己
- 27 活動報告 アーバントリップに参加して —前編：東山旧岸邸、とらや工房— k/o design studio 押野見邦英
- 28 交流委員会Aグループ 建物見学会開催 旅と想像／創造 日本ヒューム 木村 聡
- 29 交流委員会Fグループ 施設見学会開催 三建設備工業「さいたま技術センター」 三建設備工業 河合 勲
- 30 学生の会 @joint 活動報告 福島建築巡り 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 紫安洋平  
次世代のタマゴたち 蒸留所デザインプロジェクト 東京工芸大学工学部工学建築コース 佐原志央理

## ● あとがき

- 31 広報からのお知らせ 『Bulletin』編集長退任挨拶・新任挨拶／編集後記
- 2 パートナーズアイ 日本製鉄株式会社 意匠と機能を兼ね備えた「デザインング・メタル」を展開

表紙写真：(上)「桜町再開発」設計 日建設計・太宏設計 共同企業体、(中)計画のスタディに使う軸組模型 伊藤暁建築設計事務所、(下)「古澤邸」設計 リライト\_D／日本大学理工学部古澤研究室



# 「強」を考える

## 動的な強さを探す

—建築が「保たれる」ために—

伊藤暁建築設計事務所／東洋大学  
伊藤 暁



### 「保つ」ことと「新しくする」こと

今回、「強・用・美の進化」というテーマでお題をいただいた。「強・用・美」といえば、ウィトルーウィウスの『建築書』である。紀元前33～22年頃に著されたというこのテキストは、ルネサンス期に神格化されて以降、あたかも不変の真理のように位置付けられ、引き継がれてきた。そして今回の特集テーマでも取り上げられているとおり、2000年以上の時を経た21世紀の現在においてもなお、ある種の呪いのように私たちの前に横たわっているわけだが、さて、果たしてその「進化」とは如何なるものなのだろうか。進化について考える前に、そもそもその原点を確認する必要があるだろう。ウィトルーウィウスの『建築書』のページをめくってみよう。森田慶一氏による訳書には下記のようにある。

(建築は)「強さと用と美の理が保たれているようになされるべきである。強さの理は、基礎が堅固な地盤まで掘り下げられ、材料の中から惜しげなく十分な量が注意深く選ばれている場合に保たれ、用の理は場が欠陥なく使用上支障なく配置され、その場がそれぞれの種類に応じて方位に叶い工合よく配分されている場合に保たれ、美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しいシュメトリアの理論を持っている場合に保たれるであろう。」

もちろん私が接しているのは訳文であることに注意を払わなければならないが、あらためてこの一節に触れる



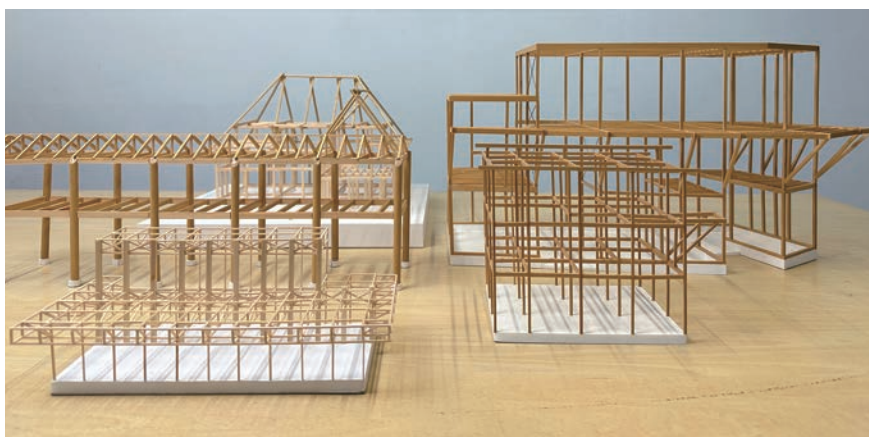
軸組があらわになった「えんがわオフィス」施工中の様子

と、ここでウィトルーウィウスが述べているのは建築が「保たれる」ことについてだということがわかる。建築は、長く保たれなければならない。その通りである。膨大な資金や資源を投じてつくられる建築が、すぐに使い物にならなくなってしまうことは望ましくない。しかし最近まで、特に日本においてはこの「保たれる」ことについてはあまり注意が払われてこなかったのではないだろうか。スクラップアンドビルドという言葉が表しているように、築後ある期間を経た建物は「壊して建て直す」ことが当たり前に行われていた時期があった。そこでは「保つ」ことよりも「新しくする」ことの方に価値が見出され、建築が社会から期待されていた役割もまた、価値を保ち続けることではなく、新しい価値を提供するというものだったといえる。もちろんそんな中でも「強・用・美」は不変の真理としての座を守り続け、疑いの目が向けられることもなかったけれど、しかし新しく建築をつくることに関心が集まりすぎた結果、このテーゼはいつしか「つくるための論理」にすり変わり、ウィトルーウィウスが述べていた「保つ」という側面は忘れ去られていたように思う。

一方現在では、資源の有限性が明らかになり、また、建設が地球環境に与える負荷の大きさが共有されるようになったことで、スクラップアンドビルド一辺倒の開発よりも既存ストック活用や持続可能性への関心が高まっている。新しく建築をつくるに際しての関心のみならず、リノベーションやコンバージョンも重要な議題となっている昨今、あらためて建築を「保つ」ことについて考えてみたい。

### 耐久性から持続性へ

建築が保たれるために必要なことは何か。文化的な保存の対象となることを除けば、使い続けられることである。「強・用・美」になぞらえるならば、そのために建築は壊れずにあり続け、使いやすくあり続け、美しく



進行中の「戸塚のオフィス」。300角の柱で水平力に対応する架構

計画のスタディに使う軸組模型

あり続けなければならない、ということになる。ただし、現代の社会の変化はウィトルーウィウスの頃とは比べものにならないくらい早くなっていて、今やある固定的な状態が社会において有用性を保ち続ける、ということに期待するのは難しい。建築に求められる用途や性能も日々更新され続けている。リノベーションやコンバージョンとは、こうした社会の変化と建築の不整合を解決するための手段だといえる。現状に何がしかの不具合が発生した時、それをスクラップして新しく作り替えるのではなく、現状に手をを入れてカスタムすることで問題を解消するというわけだ。今あるものに手を入れながら使い続ける、そのために必要なのは、建築が強く固定的であり続けることではなく、変わり続けられる柔らかさや簡易さを備えていることだといえる。物理的な耐久性だけでは、建築の寿命を評価できない社会に、私たちは生きているのだ。すなわち、建築を設計するとき、その建築が耐久することだけでなく、持続することについても考える必要性が高まっている。「持続」には、新築時の姿がそのまま保たれることのみならず、リノベーションやコンバージョンによって建物が姿を変えながらも存在し続けることも含まれるだろう。こうした改修を念頭におくと、新築時の建築のつくられ方も、強いものから、変化に対応できる冗長性のあるものへと変わっていかなければならないということになる。

### 軸組と冗長性

私が建築を設計する際、こうした冗長性をいかに引き寄せられるかはとても大切なテーマになっている。それはどうやったら実現できるのか。そのチャレンジとして、私の事務所では、軸組模型を作ることから建築のスタディを始めている。もちろんプランニングやボリューム検討の重要性は重々承知している。しかし、建築が変わり続けることを念頭におくと、プランニングは現時点での「差し当たったの要求」として捉えざるを得ず、ボ

リューム検討は建築を固定的な状態に近づけるバイアスがかかる。その点軸組は、プランニングやボリュームに関与しながらもどこか開放的で、私にとって、流動性を担保しながら建築のあり方を探る思考を促してくれるツールなのだ。建築が要請されるその瞬間や特定の状況に応答しながらも、それに囚われることなく建築が「あり続けられる」状態を描くことに適している。

こうした考え方に至ったのは、いくつかのリノベーションやコンバージョンの設計に関わった経験が少なからず影響していると感じている。改修工事の場合、既存建物の架構と向き合うことは避けられないが、しかしそれは決して設計を妨げる障害物ではなく、自由な思考を促してくれる有用な手がかりとなる。自分の設計した建築も、こうした自由さを備えたものであってほしい、そんな思いが、私の興味を軸組へと向かわせているように思う。これはリノベーションやコンバージョンに限った話ではなく新築にも当てはまる。軸組といっても構造に関する問題に限られることはなく、建築そのもののあり方にも関与するものである。軸組から広がる自由さをいかに獲得しうるか、言い換えればそれは、いかに完結しない建築を設計しうるか、という問いである。

「強・用・美」というテーマはあまりに強い。だからこそ、その三者が一体となった完全無欠な建築を考えたい。しかし、あらためてウィトルーウィウスが説いた原点に立ち戻ってみたい。重要なのは「強・用・美」が「保たれる」ことなのである。そのためには、建築を固定的な状態にとどめるためではなく、変わり続けられるための「強・用・美」を見出さなければならない。現代、建築に求められている「強さ」は、こうした動的なものなのではないだろうか。動的ゆえ、その明確な姿を掴むことはできないのかもしれない。それでも、時間軸を伴った想像力を発動させなければ、「保たれる」ことに近づくことはできないだろう。

「強」に限らず、「用」も「美」も、その進化とは、こうした思考の先に現れるものなのではないかと考えている。



# 両義的な躯体の姿

—不明瞭ながら明瞭で一体的ながら接合的なフレーム—

リライト\_D / 日本大学  
古澤大輔



## 境界線上をさまようこと

自作の構造躯体について述べようと思う。構造躯体は強・用・美でいうところの「強」に該当すると一般的には思われているが、私はこれら3つの概念を個別に切り離して考えるのは適切ではないと思っている。さらに言えば、それらの対となる概念も表裏一体のものだと捉えている。だから私が構造躯体について考えるとき、それは強いのか強くないのか、美しいのか美しくないのか、実用的なのか否かを自問自答し、強と非強、用と非用、美と非美それぞれの境界線上から躯体の姿を思い描く。なぜならば、想起したいその姿は、建物 (building) という実体ではなく建築 (architecture) という概念であってほしいからだ。人間に例えれば話が早いだろう。ヒトという生物学的実体において、個体の強さや実用さがその優位性を示すからといって、人間の価値はそれらと同一ではない。もし同一なら弱くて使えない人間を排除する極めて教条的な思想を生み出してしまふ。むしろ私たちは、人が本来備えもっている弱さ、醜さ、使いにくさの中にも、かけがえのない人間の価値を看取しているはずだ。それは、人間も建築同様、ひとつの概念だからに他ならない。概念の本質には、両義的な境界線上をさまようことでしか到達できない。従って、「Aは非Aである」という自己言及的な「意味論的考察」が必要になるのだ。

## 「建築」としての躯体

本稿で取り上げるのは私の自宅「古澤邸」の躯体である。RC純ラーメン構造という極めて普遍的な構造形式であるが、その姿は十字型となっている。閉じながら開く、包みながら仕切るといった相反項を受け止める両義的なフレームである。そして最大の特徴は、床と梁が分離していることだ。これは、一般的な構造上の合理的判断から見れば極めて異質である。当然ながら通常のRC造は、床・梁・柱・壁などの部材はすべて連続した一体的なものとしてつくられる。この一体化というコンクリートの特性は、かつての社会主義国において、一致団結する「強さ」の表象が求められる政治的記念碑に好んで用いられたという歴史的背景からも、コンクリートは

「連続的一体さ」という記号作用を発していることを意味する。そしてRC造は、部材同士の接合が明瞭な鉄骨造や木造と異なり、すべての部材が建物全体を通して流れる応力の網目であるため、接合原理に構法上の不明瞭さを抱えている。つまり、全体主義的な「強」のメタファーは、部材ジョイントがない、この一体的な不明瞭さに起因しているのである。

一方で、純ラーメンフレーム本来の姿を想起してみれば、当然ながらそれは柱と梁による格子であり、構造システム的には床を必要としない。床が梁と一体化されているのは、スラブのたわみを抑えるためであって、梁は床の補助部材でしかない。たわみはスラブそれ自体の配筋によって十分に対処できる。両者は効率的な観点から慣習的に癒着しているだけなのだ。であれば、この癒着を解きほぐし、RC純ラーメン構造の床と梁が互いに自律した存在であることを示せれば、一体的な不明瞭さと



上棟時の躯体の姿。床と梁が分離しながら積層する (撮影: Takeshi YAMAGISHI)



左：3階と4階を繋ぐ木製階段。本棚やベンチとして梁が活用される（撮影：本吉孝光）

右：3階から梁越しに2階を見下ろす。上下階の出来事が同時に知覚される（撮影：Takeshi YAMAGISHI）

いうコンクリートの「強」に、接合的な明瞭さという「非強」が意味的に重なるのではないか。こうして、不明瞭ながら明瞭で、一体的ながら接合的という両義的な境界線上から、「建築」としての躯体の姿が浮かんでくるのである。床という水平部材が柱のみに支えられ、そして垂直部材である柱が梁という水平部材のみに支えられる。水平と垂直、支持するものとされるものがジョイントレスに、しかし明瞭的に接合する。

上棟時、床が梁から解き放たれ宙を浮いているこの躯体の姿を見て、今までコンクリートがどれほど異質なものの同士の癒着させていたのかを実感した。

### 躯体を中心に展開する生活

この躯体が合わせ持つ「非強」の側面は、耐震性能が低いことを意味しない。むしろ、一層目のフレーム形状を横長にすることにつながり、最も負荷のかかる最下層での剛性増加に事後的に寄与している。従来の構造原理の合理性とは異なるという意味で「非強」なのだ。

竣工時、梁が生活空間の中を横断する躯体は、非実用的な異物のように見えた。どのように生活が展開されるのか、設計した私自身も正直想像がつかなかった。生活していくにつれて、棚やテーブル、ベンチとして十分に使えることが分かり、躯体はまるで家具のように振り舞い始めた。むしろ私たちの生活はこの躯体を中心に展開し、非実用的な異物は事後的に実用性を発現していった。そして、コンクリート躯体という本来的な「強」の人工物に、樹木のような非人工的な美しさが重なっていくのを暮らしながら実感している。

### 「建築」の逆説的な奥深さ

非用が用へ、強が非強へ転化し、暮らしの時間が堆積するごとに事後的な美しさをまとめていく。対概念を受け入れた異物は、事後的に非異物となるのだ。こうして、強・用・美とその対概念たちは互いに重なり合っていく。私は、空間そのもの、建築それ自体を対象に思考を巡らし、暮らしやすさや具体的な生活のイメージなどは極力排除して自宅を設計した。にもかかわらず、住み心地が良く快適である。この逆説的な状況に「建築」の奥の深さを改めて痛感する。私は、両義性の境界線上をたゆたう「Aは非Aである」という自己言及的な意味論的問いを、今後も考え続けていくであろう。



2階バルコニーから室内を見る。躯体を中心に生活が展開する



# 時間軸における美の継承という強

—熊本の2プロジェクトを題材に—

日建設計  
杉山俊一



日建設計  
甚内有紀



## はじめに

今回、強用美の「強」をテーマに私たち2人で執筆を、というご依頼をいただいた。長くプロジェクトを共同してきたとはいえ、2人で何を語るか？という点でお互い迷いがあったものの、設計のプロセスに新しい発見があるのでは？という感覚では何故か一致し、この寄稿に至った。

日常私たちは、数名から時には20名超のチームで継続的にプロジェクトのデザインミーティングを行う。機能条件に加え、その建築の置かれる場の時間軸と役割を課題としている点は共通しており、今回その点に特に重きを置いた熊本城下町の2つの計画を題材とさせていただいた。

『<sup>(註1)</sup>ウィトルーウィウス建築書』では、公共建築の要素として「防衛的・宗教的・実用的」を挙げており、同時に「強・用・美」の必要性が説かれている。両計画進行中、2016年4月に熊本地震を経験した。計画が一時中断する中、被災者でもあるクライアント・行政の方々とのディスカッションの中からこれらの計画に与えられた中心地区としての役割の共有は、より強化されたように思う。災害に対する物理的または運営上の「強度」については当然多くの検討を行い実施してきたが、ここではあえて「時間軸における美の継承という強」を題材にした。

## 熊本城下の2計画と「時間軸における美の継承という強」

2019年に日本最大級のバスターミナルや商業、ホテル、九州最大級のホール等を含む桜町再開発施設、2021年に公園・広場と熊本城下の広小路を含む<sup>はなばた</sup>花畑広場が完成した。私たちはプロポーザルを通して両計画の設計機会に恵まれ、杉山は全体総括、甚内は主に再開発のホールを担当した。

この地区は、武家屋敷群と、加藤家から引き継いだ細

川家の花畑屋敷と回遊式日本庭園 陽春庭がかつてあった場所で、樹齢700年といわれる大楠と共にその名残を残す。明治以降も陸軍、専売公社、県庁、そしてバスターミナル、ホテル、百貨店が置かれ、歴史の中で街の中心であり続けた場での計4haを超える2つの計画。事業性や機能性ととも、この地の歴史を次の時代にいかに伝えるのか？ということが設計チームの最大課題だった。

日本の現代建築の寿命は大規模災害起因を除いても長くても100年。経済起因で早期に解体されるものも多く、時間軸の観点で、ウィトルーウィウスの「強」という定義に値する建築を思考しにくい。

一方、この城下町再生において、熊本城との関係は不可避であり、早々にこの名城における「強」は石垣にある、という一般論に行き着く。茶臼山の形状を巧みに壇状の廓の積層に置き換え、その断面に武者返しと呼ばれる石垣、その縁に長塀や櫓、そして天守閣。ここに、瓦・漆喰・黒板塀による三層構成が共通して現れる。普請の匠、加藤清正が石垣と天守閣他木造建築による城の計画の中で、永続性を求めたのは、むしろ縁を伴う廓と石垣の重なりであり、天守閣・櫓・長塀は廓の縁に置かれ、そこに共通の記号三層構成を用いたのでは？という思考に至った。

陽春庭については、学術的資料が少なく、現存する絵図や古地図と周辺域の地形の考察から、今回の計画に参照すべき4要素「熊本城と庭続き」「借景」「水景」「舞台」を私たちの設計チームなりに読み取った。

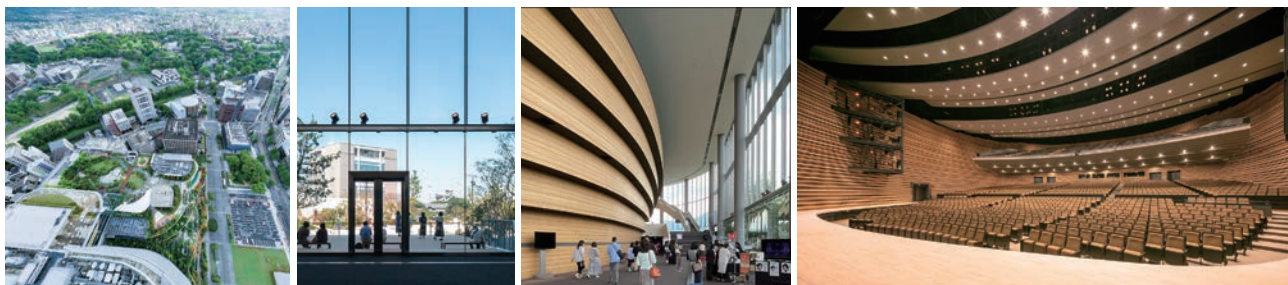
以降の設計チームのデザインワークは、プランニングにおける廓と櫓の構成、立面における廓の縁の三層構成を用いた積層デザイン、庭における陽春庭の4つの要素の現代への応用が主題となった。

大規模複合施設では、事業性検討に伴い導入用途・規模が常に変動し、各設計担当はそこに奔走するが、初動



熊本城の廓のレベル(地上約30m)に桜町の庭の高さを揃えることで「熊本城と庭続き」を形成





熊本城と繋がる再開発施設と花畑広場

ホワイエから見る桜町の庭と熊本城\*

雛壇状に積層したメインホールホワイエ

積層された壁面が上部に向かって広がるメインホール内観\*

期にこの動きに耐えられる強い方針をチームで共有することが必要となる。ここでは敷地南側に高さ50m前後の用途、北側に熊本城の最初の石垣による廊のレベル：地上約30mの用途をまとめ、その屋上に1.2haの桜町の庭を提案した。この庭は周囲の建物群を超えて「熊本城と庭続き<sup>(注2)</sup>」のイメージを形成しつつ、大ホール・商業他の施設群を繋ぐ役割を持つ。さらに低層商業施設は多様な曲線の積層とし、その縁に前述の三層構成を現代の材料に置き換えて用いることで花畑広場を含めた城域が一体となる強いイメージ形成を試みた。この地の「美」の特性を「用」の構成に活かすというところか。

また、ホールホワイエやバンケット、商業に囲まれた桜町の庭においては、陽春庭の4要素を現代の計画に盛り込み、かつての大名の嗜好の場である陽春庭を人々の憩いの場に置き換えた。

3haの敷地に建つ再開発施設はそれ自体が1つの街のスケールとなる。施設の骨格となる主要動線に外部の三層構成を引き込み、熊本城ホールでは2階ロビーと屋上の庭レベルのメインホールに雛壇状の積層構成を用い、外部から内部への一体イメージの形成を試みた。座席数2,300席超のメインホールはメジャーアーティストの全国ツアーも目途に計画されたが、同時に県内外の多数の人々にとって、この街全体の強いイメージを印象付ける絶好の場となる。ホワイエからは地上30mの桜町の庭と、その先に熊本城を一体に望むことができる。この舞台ー水景ー城のシーンを創るため、庭の計画はマスタープランから工事最終段階の植栽選定・設置まで意匠・外装・ランドスケープ・造園工事、さらにクライアントを含め、

共同で進めた。

このホワイエとホール内部壁面も一対の積層構成とした。工事着手後のホール運営専門家たちとのディスカッションの中で、もともと垂直だった内部壁面を上部に向かって開き、雛壇状に積層する変更提案を行った。これらを通して「熊本城と庭続き」のイメージをより強く記憶する場になることを意図した。

花畑広場計画においては、かつての広小路であり再開発施設と公園・広場をつなぐ230mの通りを8つに分節し計画を行った。このマスタープラン原案は桜町・花畑地区まちづくりマネジメント検討委員会の有識者の構想による。熊本城は配置計画から7つの廊を読み取ることができ、その縁に櫓が配置されている。城の廊からの景観が新たな広小路と公園・広場の空間に繋がることを目指した。管理運営を担うサービス棟や、地下自由通路との接続を担う施設を広場・公園の縁に配置し、城との連続性とともに、再開発施設の屋上の庭との一体化を意図して計画を行った。

歴史の中で培われてきた時間軸における「美」を、この時代の建築の新たな挑戦の中に継承し、次の時代に繋ぐ役割自体に「美の継承という強」があり、そのことが日本的な「強」なのではないか？

10年超にわたった2つの計画の過程を再考し、強・用・美の相互関係を考察する機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

〈注〉

- 1: 東海選書『ウィトルーウィウス建築書』森田慶一訳註
- 2: 桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント検討委員会策定の基本構想

\*写真撮影：エスエス九州支店



広小路と一体となる桜町再開発

「熊本城と庭続き」となる再開発施設と花畑広場

三層構成を用いた外装\*

熊本城長塙の三層構成

「陽春庭中之図」(公益財団法人永青文庫所蔵)

2023年度特集テーマ

## 「強・用・美の進化」プロローグ

## 共有できる媒体として

『Bulletin』編集WGにて特集記事を検討した結果、建築に配慮されるべき事柄を端的かつ包括的に表現し、古来より知られている「強・用・美」を、今年度のテーマとすることにしました。ウイルスや戦争などに悩まされ、目まぐるしく移り変わる状況に置かれた我々にとって建築とは何なのか、改めて原点ともいべき場所から、問いを投げかけてみてはどうだろうかと考えました。「強・用・美」はどのような建築にも内在していると考えます。伝統的に建築家の誰もが知る不変の言語ゆえに、建築家の考える建築の特性や一般性を認識し、共有する手がかりとなるかもしれません。

今は多様性を認め合う時代と言えます。「強・用・美」が、個性豊かな建築家同士のあいだを取り持つ媒体となってくれることを期待しています。ハンナ・アレントの著書『人間の条件』<sup>(1)</sup>には、人々の真中にテーブルが位置することで、人々を結びつけ同時に距離を保つことの例えが登場しますが、このテーブルになぞらえるなら、「強・用・美」<sup>(1)</sup>が皆で建築を論ずるためのテーブルの役割を果たしてくれることを願っています。

## ウィトルーウィウス、パラディオ、ヴェンチューリ

「強・用・美」はウィトルーウィウスの『建築十書』第一書・第三章-2に登場し、次の一節から始まります。

「これら（建築を建てること）は、また、強さと用と美の理が保たれるようになさるべきである。」<sup>(2)</sup>

その後、強さの理・用の理・美の理の順に説明が続きます。

ルネサンスの建築家アンドレア・パラディオの『建築四書』では、ウィトルーウィウスを自身の研究に絡め、発展させています。第I書・第1章「建てはじめる前に考慮し、準備しておくべきこと」の冒頭には次の一節があります。

「いかなる建物においても、（ウィトルーウィウスがいつているように）、三つの事柄が配慮されるべきであり、それらなくしては、どんな建物も称賛に値するものとはならない。そして、これら三つの事柄とは、有用さ、あるいは便利さ、耐久力、そして美しさである。」<sup>(3)</sup>

その後、便利さ・耐久力・美しさの順にどのようなことに留意すべきかを説いており、ウィトルーウィウスの定義を引用して建築の倫理観の基としていていると考えます。

現代ではロバート・ヴェンチューリの著書『建築の多様性と対立性』の中に次の言説が登場します。

「しかし、建築は古くウィトルーウィウスの唱えた、必要性、強さ、喜びといった諸要素を含むが故に、必然的に多様性と対立性を備えているのである。」<sup>(4)</sup>

必要性・強さ・喜びとは「強・用・美」を指すと考えられますが、なかでも「美」を「喜び」と情緒的に述べているところは、読み替えることの意図や自由さを感じます。以上のことから、後世では、「強・用・美」を当初の意味のまま固執するのではなく、時代にふさわしい解釈や使い方へ発展させることが可能ではないでしょうか。

例えば建築家の難波和彦氏は、「強・用・美」に「エネルギー」を加えた「建築の四層構造」を理論的背景にして設計していることが知られています。

「強・用・美」の概念に着目することは現代の建築に対する視点を改めて整理するきっかけになり、建築の時代性を表すことになれば良いと考えます。

## 今年度の進行について

今年度の予定としては4回のうち夏号から冬号にかけて「強」「用」「美」を順に取り上げ、来年春号ではそれをまとめた内容を掲載できるようにしたいと考えています。

執筆を引き受けてくださった皆様には、この場を借りて心より謝意を表します。さまざまな建築家の思想を読み取ることができる貴重な場となることと思っておりますので、読者の皆様はどうか引き続きご期待ください。

（『Bulletin』編集長 佐久間達也）

## 〈参考文献〉

- ハンナ・アレント著、志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房、1994年、pp.78-79
- 森田慶一訳註『ウィトルーウィウス建築書』東海大学出版会、2008年、p.15
- 桐敷真次郎編著『パラディオ「建築四書」注解』中央公論美術出版、1986年、p.35
- R・ヴェンチューリ著、伊藤公文訳『建築の多様性と対立性』鹿島出版会、1982年、p.33



# 景観論から建築設計の世界へ



会田友朗

今春、ようやくコロナ禍も落ち着きを見せた新学期。非常勤講師を務める大学の製図室に集まる2年生に、小規模パブリックスペース（公園）の設計課題の小テーマ「Meaningful Garden～意味に満ちた庭～」をA4一枚にまとめて配布した。幾分抽象的な問いに狐につままれたような表情の学生たちだったが、今後のエスキスはどのようなだろうか。内容に直接的な関係はないが、この連載タイトルにあえて同じ名を与えた。僕自身も彼らと並走し、新たな課題に挑むつもりで原稿に向かおう。

思えば30年近く前、僕自身は東京工業大学の社会工学科で公園をはじめとするまさにパブリックスペースの設計課題に取り組んでいた。4年生になり景観工学の中村良夫研究室の扉を叩き、その後米国東海岸に留学、美術大学の建築学部へ編入・卒業、その後大学院にて建築学を修了し、ニューヨークの設計事務所で1年間働いた。計5年滞在の後に帰国後まもなく幸運にも公共建築（博物館）の設計監修に携わる機会を得て、共同で事務所を設立した。2009年、自らの設計事務所へ改組し、現在は東京・神楽坂にアトリエを構えている。本連載では、こうした来歴を時間順に辿る予定だ。しばらくお付き合いいただければ幸いである。

## 記号論をベースにした風景研究

さて、恩師である中村良夫先生は、土木分野において日本の景観工学の礎を築いた1人である。数多くの理論的な著作とともに景観デザインの実践にも携わるが、僕が研究室に入った頃は代表作の古河総合公園の仕事がちょうどひと段落し、哲学的な思考の探求に重心を移していた頃であったと思う。先生の景観論の講義は、言語学者ソシュールの記号論をベースに「テキスト」としての景観が生成する意味の連なりについて解釈するもので、諸先輩の研究も江戸名所図会や池泉回遊式庭園の空間を題材に風景体験の分析を試みるものが多かった。学生時代に風景研究の膨大な仕事の一端に触れたことが、今でも僕の設計の思考の基本的な枠組みに深い影響を与えているのは間違いない。

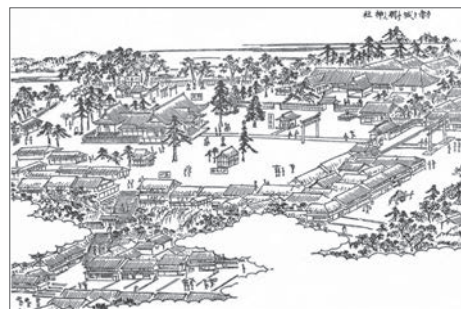
また、卒業論文を指導していただいた博士課程の先輩にはさらに直接的な影響を受けた。ベルント&ヒラ・ベッヒャーの一連の仕事について知り、ウンベルト・エーコ

の『薔薇の名前』を読んだのもこの頃だ。ザハ・ハディド事務所勤務を経た留学生の研究は、ニューヨークの地下鉄のポスターが幾重にも剥がれた痕跡が生み出す新たな意味を分析するユニークなものだった。

## 「見立て」と「意味」

そんな環境下で、卒業論文「都市構造物の転用に関するデザイン論的研究」を書いた。銭湯を現代美術ギャラリーとして転用した有名な「SCAI THE BATHHOUSE」の例に衝撃を受け、国内外の事例を分類・整理した。本来異なる機能のために設計された建築や構造物が、他の用途に使われており、機能的でもあり、またむしろ迫力を感じる事態とは何だろうという素朴な疑問から選んだ題材だった。理論的な枠組みに悩んでいたある日、中村先生は柔和な表情のなかに眼光鋭くじっと僕の目を見て、一言。「会田くん、これは要するに『見立て』なんだよ」。一気に方向性が定まり、がむしゃらにレトリック＝修辞学の文献を読み漁ったのを記憶している。大学卒業時は想像もできなかったことだが、その20年後の2018年、空間デザイン総合監修を務めた宮崎県の都城市立図書館が開館した。廃業したショッピングモールを公共図書館として転用したものだ。まさにショッピングモールの空間的な特徴を図書館として「見立て」ることから始まったプロジェクトであることは、2023年冬号の『Bulletin』の特集記事で書かせていただいた通りである。

かくして僕は大学時代、デザインの分野に、技術や意匠からではなく「意味」の文脈から足を踏み入れた。一方で、当時、意味的な解釈だけでは設計＝ものづくりは難しいというジレンマを感じ始めていたのも事実。留学して建築の基礎を学ぶことを真剣に考え始めていた。



江戸時代の赤城明神社周辺（「江戸名所図会」より）  
現在のアトリエの位置は下部に見える「赤城坂」沿いの1階。  
風景や街並みへの関心に導かれて辿りついた立地。



中村良夫「風土自治」  
2021年刊の近著  
風土から生まれ、受け継ぐ都市論のさらなる展開。



# ロサンゼルス

—2026ワールドカップ・2028オリンピックに向けて—



チアヤ ヤスノリ

2020年3月コロナ禍で一変した日々から3年が経ち、リモートワークから、事務所通勤する日常にすっかり戻りました。コロナ前には、100年来の好景気と言われたカリフォルニアの建設業界も少し落ち着きを取り戻したように見えます。

ロサンゼルス街全体を見渡すと、アメリカ、カナダ、メキシコ、3カ国の共同開催となる2026年サッカーワールドカップ、2028年のロサンゼルス・オリンピックに向けて、着々と準備が進行しています。

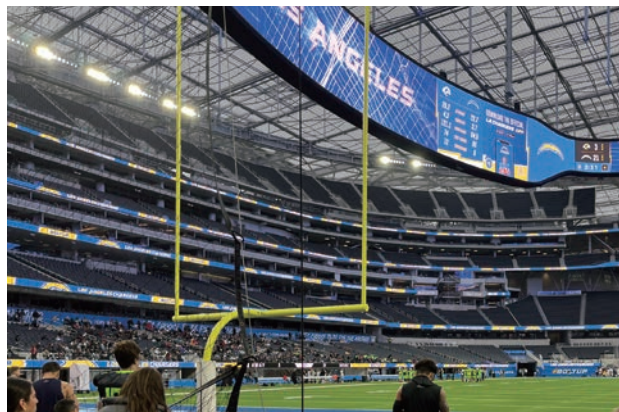
## イングルウッド (INGLEWOOD)

コロナ禍の真っ只中の2020年秋、イングルウッド市に完成したSo-Fiスタジアム。本来はNFLの2チーム、LA RamsとLA Chargersのホームスタジアムなのですが、サッカーワールドカップの会場として使われます。サッカーワールドカップは全米各地とカナダ、メキシコの全11都市のスタジアムで試合が開催されます。このスタジアムは、FIFAの方針で期間中はLos Angeles Stadiumと呼ばれます。ロサンゼルス国際空港の東側、空路の真下となるスタジアムは、高さを抑えるためにフィールドは地下にあります。外から見ると、7万人以上収容可能な座席エリアは、室内のドーム球場のように錯覚するのですが、構造上独立したキャノピーがフィールド全体を覆っているだけで、風が吹き抜けます。フィールド上部には、巨大なLEDスクリーンが設置され、どの席からも映像を見ることが可能です。最新のレポートによると、FIFAの規定で定められたフィールドの幅を確保するには、ワールドカップの決勝戦に必要な8万人と定められた座席を設置できないことが分かり、決勝戦はダラスかニューヨークで行われる可能性があるようです。



建設中のSo-Fiスタジアムを機内より撮影(2019年10月)

さらに、2028年ロサンゼルス・オリンピックでも、スポンサー名を使わずにSo-Fiスタジアムで開会式と閉会式が開催される予定となっています。ただし、1932年と1984年のオリンピックで開会式会場となったLos Angeles



So-Fiスタジアム内部、上部には巨大なLEDスクリーンが設置されている

Memorial Coliseumも同様に開会式・閉会式会場と記されているので、最終的にどちらか1箇所に絞られるのか、あるいは、演出上2つの会場となるのでしょうか。

イングルウッド市は、近年積極的にスポーツ施設を誘致しており、NBAプロバスケットボールClippersの本拠地Intuit Domeも建設中。プロの施設だけでなく、近隣の人々が使えるテニスコートや野球場なども整備されています。何よりも、空港からのアクセスに便利な立地条件は魅力的です。

## ロサンゼルス国際空港 (LAX)

ロサンゼルス国際空港は、西側に太平洋を望むビーチ、北と南は住宅街が隣接していて、滑走路の拡張は地理的に困難な上に、各空港ターミナルへのアクセスに公共交通機関がなく、車のみという不便な空港でした。コロナ前の混雑時には、空港アクセスの入り口から1番奥に位置する国際ターミナルまで、通常なら5～10分ほどの距離を1時間以上かかったこともあり。そのような状況を改善すべく、2019年春、APM (Automated People Mover) と呼ばれるシステムの建設に着工しました。3つの駅が各ターミナルに繋がり、計画中のターミナルが完成すれば、さらに1つの駅が空港内に加わります。空港外に新設される3つの駅は、一般駐車場、メトロへの乗換駅、終点はレンタカー各社の駐車場に隣接します。本来の予定より遅れているようですが、2024年に完成すれば、24時間APMで空港にアクセス可能となります。現在、



ロサンゼルス国際空港、左の国際ターミナルとブリッジで繋がる新設駅が右手



空港全景、ターミナル工場のクレーンが見える



右の高層ビル群がLAダウンタウン、中央奥に降り積もった雪山が見える

空港内は至るところで工事中なので、足場や工事車両ばかりです。

さらに、増加する国際便に対応するために、West Gates国際線ターミナルが2021年に増設されました。店舗が充実している今までのターミナルから地下通路で繋がっていますが、余裕をもって移動しなければゲートにたどり着くまで5分以上かかる距離です。

## 光と陰

他にも市内では、Herzog & de Meuronによる LACMA (ロサンゼルス カウンティ美術館) が進行中。大通り Wilshire Boulevardの上にブリッジ状に覆い被さる部分が、ストリートスケープを一変するはず。MAD Architectsが設計した Lucas Museum は、Los Angeles Memorial Coliseum に隣接していて、2025年に完成予定です。

それらのような巨大なプロジェクトの整備が進む街並みの陰で、ホームレス問題は深刻化する一方の様子。近年は、フリーウェイの高架下、法面、住宅街の一画にある公園などにもテントが並んでいます。あるいは、駐車禁止のサインがない通りにモーターホームを駐車し、ずっと同じ場所で生活している人々もいて、周りには生活道具が並べられていたりもします。高騰した不動産価格は下落傾向にあるものの、数年前に比べて住宅ローン金利は上昇しているので、大都市での住宅購入は難しくなるばかり。相変わらず続くインフレの影響で、建設資材だけでなく、労働賃金も高止まりしたままです。不透明な世界情勢、金利上昇等も影響しているのか、ロサンゼルスでは空き地のままの敷地も点在しています。

コロナ禍によってなくなったフリーウェイの渋滞は、ほぼ逆戻り。コロラド川の水位低下などによる南カリ

フォルニアの干ばつは、何年も続いたままです。ネバダ州ラスベガスでは、昨年より危機的な水不足に陥っています。そんな状況のなか、今冬は雨や嵐が毎週のように続いているため、干ばつ状態が少し解消されたようです。例年なら冬でも晴天が続くロサンゼルスで、今年3月には雹<sup>ひょう</sup>まで降ったのですから驚きです。数日前には、ロサンゼルス・ダウンタウンから東に車で10分ほどの街で竜巻が発生しました。このような悪天候が毎週続くので、地滑りや道路の陥没、山間部での積雪による道路封鎖など、降雨、降雪対策は脆弱な街であることが露呈しています。やはり、気候温暖化が進行しているのでしょうか。

そのような背景を考慮してか、今年から、カリフォルニア州のアーキテクト登録更新に、今までのバリアフリー、ADA (Americans with Disabilities Act) に加え、ネット・ゼロ・カーボン・デザインの講習が必須となりました。CO<sub>2</sub>排出量の削減、LEEDを通して、サステナビリティが浸透してきた建設業界ですが、温暖化対策にはまだまだ十分ではないということなのでしょう。

グッゲンハイム・アブダビなど、フランク・ゲーリーのプロジェクトは世界各地で進行中です。ディズニーコンサートホールの南東に位置する The Grand LA は、昨年完成しました。90代半ばになっても、フランクは、クライアントとミーティングしたり、模型を眺めながらプロジェクトのスケッチを描いたり、毎日元気に事務所内を歩き回っています。

## チアヤ ヤスノリ

2006年よりゲーリー・パートナーズ勤務、シニア・アソシエイト  
カリフォルニア州登録アーキテクト



## SDGsとフェアウッド



ワイス・ワイス  
佐藤 岳利

近年、自然災害は日本各地、そして世界中で猛威を振るい、その規模、被害は年々拡大しており、その深刻さから「気候危機」という言葉も使われるようになりました。こうした世界規模の問題の解決は、人類共通の喫緊の課題であり、我々の生活スタイルそのものの見直しが問われています。

適正な木質資源の利用は、地球温暖化対策、生態系の保全、地域社会の健全な維持など、持続可能な循環型社会の実現を目指す「SDGs」と密接な関係があり、その目標達成に大いに貢献できると考えられています。一方で、熱帯の森林を中心に世界の森林は急速に減少しており、日本の森林はさまざまな問題を抱えています。

森林は適正に管理すれば枯渇することのない自然再生の循環型資源であり、二酸化炭素の吸収源として、また石油に代わるエネルギーの供給源として注目が高まっています。

ワイス・ワイスが2008年より取り組んでいる「フェアウッド<sup>(注1)</sup>と国産木材」について、4回の連載にてお話しさせていただきます。JIAの皆さまとの情報の共有を通じて、豊かな未来を切り開いていくきっかけになれば幸いです。

### 「フェアウッド」の背景にある違法伐採問題

皆さんは日本が先進国の中でも有数の違法伐採木材の輸入大国ということをご存じでしょうか？違法伐採とは、それぞれの国の法令に反して行われる伐採を指すもので、森林から私たち消費者の手に届くまでの過程で法令に違反する行為があれば、その木材は「違法伐採」なのです。世界に流通する違法伐採木材・木材製品の規模については、正確な数字の把握は困難ですが、インターポール（国際刑事警察機構）の分析によると世界全体で年間300億～1000億米ドルにのぼるとされています<sup>(注2)</sup>。また、英国王立国際問題研究所（チャタムハウス）の報告では、日本の輸入木材の9%が違法伐採の疑いがあると指摘されています<sup>(注3)</sup>。

違法伐採が引き起こす問題は、木材生産地の環境や森林に依存する周辺住民の暮らしや文化を破壊しうるだけではありません。コストをかけずに生産された違法伐採

木材が、不当に安い価格で国際市場に流通することで、持続可能な森林経営を阻害することが指摘されています。日本の木材市場から違法リスクの高い木材を取り除き、違法伐採対策を強化していく必要があるのです。

2023年2月28日、日本の木材業界、建築業界に大ニュースが飛び込んできました。政府が「クリーンウッド法」（合法伐採木材等の流通及び利用の促進に関する法律）の改正案を閣議決定したのです。これまでは事業者の努力義務としていた合法性の確認を義務化し、罰則措置も盛り込み強制力を持たせることになるのです。なお、改正案は現在国会で審議中であり、2025年度中に施行を目指すことになります。



開発される熱帯雨林 左：インドネシア・東カリマンタン州、右：マレーシア・サラワク州（写真提供：国際環境 NGO FoE Japan）

### ワイス・ワイスの誕生

私は乃村工藝社に入社するとすぐに香港に赴任しました。そして1年後にシンガポールに移り、4年後にマレーシア、そしてタイに赴き、ホテルや百貨店の建築現場に7年間従事しました。

アジア諸国では、プロジェクトの合間によく旅をしていました。最初は観光地を巡っていましたが、観光化していない村に興味を湧いていきました。インドネシアには13,000以上の島があり、300以上の民族が住んでいるそうですが、ジャワ島、バリ島以外にもさまざまな島にさまざまに魅力的な民族が住んでいることが分かり、次第に奥へ奥へと旅をするようになっていきました。スンバ島という島には数十の部族が暮らしていますが、奥地に入っていくと、いわゆる非文明的な社会が広がっていました。基本的に貨幣は流通していません。ホテルも学校も、電気、水道、ガスもありません。私が一番驚いたのは、どの村を訪ねても、人びとが実に楽しく、快適に暮らしていたことでした。川が流れ、森に囲まれ、家族とともに笑い、歌い、実に優雅に楽しそうに暮らしてい



たのです。資本主義、経済社会にどっぷりつかって育ってきた私にとっては晴天の霹靂でした。そして、この人たちがひょっとしたら自分より豊かなのではないだろうかと素直に思ったのでした。生まれてから一度もお金を見たことも、もちろん使ったこともないだろうこの人たちが、幸せである。私にとっての“豊かさ”の概念が崩れていきました。

その後も“豊かさ”を探しに島のさらに奥の部族を何度か訪ねたところ、「そんなにここが気に入ったら婿になってずっとここに住んだら良からう」と酋長に言われ、自分の人生の転機に戸惑いながらその日は床に就いたのでした。しかし、このまま自分がここに残るのではなく、日本に帰って自分の中にある豊かさを求めるような仕事がしたいと思い直し、スンバ島からバリ島を経由してシンガポールのオフィスに帰ると、なんと「本社勤務を命ず」という辞令が届いていました。そして、日本での勤務が始まり、しばらくすると、全社員に対して社内ベンチャーを募集する張り紙が目飛び込んできたのです。応募するとなんと採用され、1997年4月、“豊かな暮らし”をテーマとするライフスタイルブランド「ワイス・ワイ



ス」を設立。社内のコピー用紙置き場に看板が掲げられ、社内ベンチャーとして始動することになりました。

スンバ島の人々 1993年

### 豊かな暮らしとフェアウッド

バブル崩壊後ではあったものの、社会には立ち直りの兆しがあり、やがてライフスタイルブーム、アジアブームがやってきて、ワイス・ワイスは瞬く間に急成長を遂げました。本社本店を表参道に移し、社員は40名を超え、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでした。年間100以上ものオリジナル商品を開発し、飲食やカルチャー事業を展開、六本木の東京ミッドタウンに暮らしの道具の専門店を出店し、このまま成長していくのかと思われました。

ところが、転機は急にやってきました。

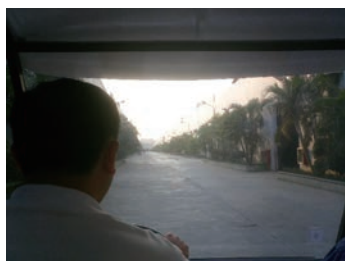
耐震偽装事件、いわゆる姉齒事件に端を発し、新築の着工件数が著しく停滞。市場に仕事なくなり、1つの物件に10数社が群がるようになりました。家具の市場価格がどんどん下がり、プロジェクトから利益を得ることが難しくなり、高額商品も売れなくなっていきました。

競合他社はこぞって中国をはじめとする海外に生産拠点を移し、価格競争が激化、デフレ経済に突入、2008年にはリーマンブラザーズが破綻、クライアントの倒産や未払いが発生し、会社経営が一気に傾く事態に陥ってし

まったのです。

競争に負けるわけにはいかないので、ワイス・ワイスも中国の深圳、上海、北京などに価格競争力のある工場を探し求め、結果として泥沼の価格競争に巻き込まれていきました。それに伴って、品質不良に起因するクレームの頻度が高まり、その対応に振り回されるようになりました。そのような状況下で、中国の工場を訪ねる機会が何度もあったのですが、そこで見た光景が後にフェアウッド調達へ舵を切るきっかけとなりました。

その工場は丸太から家具の完成品までを一貫して製造する巨大な施設で、1つの大きな街のようでした。工場には、どこからやって来たのかわからない、とてつもなく太くて大きな原木が絶え間なく搬入され、1日に500台ものコンテナが家具を満載して出荷されていきました。



まるで街のような中国の巨大家具工場

中国にはこの規模の工場は何百とあるはずで、このようなことを続けていたら、間違いなく地球は持たないだろうと直感的に思えました。

日本に帰ってきて、友人に中国で見たその光景について話をしたところ、熱帯雨林や違法伐採など木材のリスクについての指摘を受けました。私はその時、それまで感じたことのないような、まさに頭を殴られたような衝撃を受けたのです。“豊かな暮らし”を掲げて起業したワイス・ワイスが、先住民の人権侵害や人や動植物の命の犠牲の上に成り立っているかもしれない。ちょうどそのころ、私にとって初めての子どもが生まれました。この子が大きくなった時に、会社を存続させる、家庭を養うという大義はありながらも、父親が地球環境を傷つけた代償で得たお金で自分が育ったことを知ったらこの子はどう思うだろう？自分が当事者であるかもしれないと気づいた以上、もう後戻りはできない。そして1つの結論に至りました。それは、「何年かかるかわからないけれど、今、この瞬間からフェアウッドカンパニーとして生まれ変わろう」ということでした。

(次号「フェアウッドへの道」へつづく)

〈注〉

- 1: フェアウッドとは、伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材・木製品のこと。
- 2: 出典：環境省～森林と生きる 世界の森林を守るため、いま、私たちにできること～ [https://www.env.go.jp/nature/shinrin/download/forest\\_pamph\\_2016.pdf](https://www.env.go.jp/nature/shinrin/download/forest_pamph_2016.pdf)
- 3: 出典：エネルギー、環境、資源 | 2014年11月 「違法木材の取引：日本における取組 チャタムハウスの評価」 榎井まり <https://www.chathamhouse.org/sites/default/files/publications/research/20141125IllegalLoggingJapanMomiiJapanese.pdf>

# 建築士の予算管理義務



山崎哲法律事務所  
弁護士  
安藤 亮

## 物価上昇の影響

コロナ禍、ロシア・ウクライナ情勢等が原因で、建築資材が高騰し、建設業界へ深刻な影響を及ぼしていることは周知のことと思います。建築資材やその他の経費の高騰により、設計当初の見積額から相当な予算超過となることもあるのではないのでしょうか。施主から、「こんな予算では家を建てることはできない。だから契約を解除する。報酬も支払えない」、などと言われた経験はありませんか？

今回は、建築士の予算管理義務について検討したいと思います。

## 大阪地裁 平成25年12月5日判決

建築士の予算管理義務について判示した裁判例をご紹介します。事案の概略は以下の通りです。

設計契約に基づき設計業務を行っていたところ、施主が協議に応じないとして、設計者は設計契約を解除しました。そして、設計者は施主に対し、業務の割合に応じた業務報酬を請求しました。これに対し、施主は、設計者の設計に基づく施主宅の建設工事費用を5000万円、仮に上回っても6000万円までとする旨の合意があったとし、設計者は合意した予算内で設計を行う義務を負っていたと主張しました。そして、設計者は予算合意に違反しているため、設計業務は契約の本旨に従ったものではなく、そのため、報酬請求権は発生しないと主張しました。

これに対し、裁判所は、「設計開始前あるいは基本設計段階において、大まかな建設工事費の予測が示され、これが施主・建築士間の共通認識となっていたとしても、建築士において直ちにその予測された建設工事費の範囲内で設計を行うべき法的義務を負うとはいえない」とし、設計者の報酬請求を認めました。

また、その根拠として、「施工とは別に建築士に設計を委託する場合には、建築士が完成させた設計に基づいて施工業者が見積もりを行うことではじめて具体的な建設工事費が示されるのであり、そもそも、建設工事費は、実施設計段階で決定される内装、建具、設備、外構等の詳細な仕様、グレードなどに大きく左右されるものであ

るから、建築面積や延べ床面積、構造の種類等により基本設計段階でも大まかな予測程度は可能といえるものの、具体的な予測は困難な事柄である」「このことは、建築士に設計を委託し、施主の要望を柔軟に反映した設計をする場合には尚更であり、その要望を反映した結果として建設工事費が高額になることは十分あり得る事態」であるということを挙げました。

つまり、予算はあくまで予測に基づくもので変動があり得るもので、確定的なものではない、という理解を示したものといたします。

## 裁判官の見解

他方で、東京地方裁判所の建築専門部の裁判官が書いた本では、設計者は、施主から提示された予算の範囲内で収まるような設計をすべき義務を負うとされています(齋藤繁道編著『建築訴訟』、p.100)。施主と設計者との間で、一定の工事予算についての提示や確認があるのが通常であるためです。

一方、工事費は施工業者により決められるものであり、設計者の一存ではいかんともしがたい側面があることは否定し難く、設計者としては、ある程度の見込みに基づいて予算を提示せざるを得ない、とも述べられており、ケースバイケースであるといえます。

## 予算に関するトラブルの対策

大阪地裁の判決は事例判断であり、ケースによっては予算合意が認められる場合もあると思います。また、裁判官の見解も上記の通りです。そのため、設計に携わっておられる皆様としては、できる限り予算に関するトラブルを未然に防ぐ必要があります。

本連載第1回(2022年夏号)でも述べましたが、コミュニケーション不足によるトラブルを防止するには、「相手は分かっているであろう」と安易に思うのではなく、予算の増額について施主に丁寧に説明し、理解を促すとともに、予算の内容や協議の経緯について、議事録を都度作成するということが重要です。それが難しければ、少なくともメールで内容を確認するようにしましょう。

# 里山資本主義を生かした 建築まちづくりはできるか

— 行き過ぎた資本主義の問題 —



建築まちづくり委員会  
飯沼竹一

建築まちづくり委員会では、上記テーマで話題の3書籍『人新世の「資本論」』（斎藤幸平）、『里山資本主義』（藻谷浩介）、『土地はだれのものか』（五十嵐敬喜）をメンバーで担当し、読後感をもとにディスカッションしています。建築まちづくりは公益性という意味で、利用者や住民にとって何が大切なのか、という根本的ビジョンが求められ、書籍から3回シリーズで浮き彫りにします。第2回は『里山資本主義』について飯沼竹一氏です。（連 健夫）

2013年発行のベストセラー。建築やまちづくりにはあまり関わりがないかと思いつつ読み進めたが、人、モノ、情報の見方や捉え方が面白く、人の集まりや地域の活性化の工夫など興味深い。この里山資本的な発想、考え方はこの人口減少時代に突入した今、とても大事な論点であり、私たちが自らを見直す必要があると感じた。

## マネー資本主義とは

- ・ 効率最優先と大量生産大量消費、常に人と物が移動
- ・ お金を持つことが価値観であり、利己主義による勝ち組負け組の格差があり、自己責任の追及と弱肉強食の社会
- ・ 大量の物と情報に溢れる社会に豊かさ、欧米的な暮らしを求めて都会に集中
- ・ 大きな政府、公共事業のバラマキ、毎年税収の2倍以上になる国家予算

このような経済活動は日本が戦後培ってきた社会であり、悪いことばかりではなく1980年代までは上手く回っていたはずだが、それから30年、行き過ぎたきらいがある。

## 里山資本主義の考え方

- ・ ヒト、モノ、カネ、情報が使い潰されず、淀まず循環し再生、次世代に続いていく社会
- ・ バイオマス利用や休耕地の放牧、空き家の施設利用など、エネルギーが少なくすむ生活、経済活動
- ・ 地産地消、効率優先からの変革、大量生産大量消費からの脱却、あまり成果を求めず、無理なく楽しいことを手段
- ・ 自然のある田舎暮らしからお金を使わなくても工夫し楽しい豊かなライフワーク
- ・ これまで避けてきた人情、きずなの復権。Uターン、Iターンによる地域活力の向上
- ・ 仕事に満足度があり、人の役に立っているというダイレクトな達成感

お金だけに依存するのではなく、地域にある資源や場所に付加価値を与えて事業にする、自給自足を取り入れる、地域コミュニティを形成することで持続可能な社会を目指すという思想である。

## 里山資本主義を実践する

里山資本主義を保険にするという主張は面白く分かりやすい。これは個人でも水、食料、燃料があれば生きていける、その備えを保険とし持つものだ。災害や戦争な

どで経済活動が停滞すれば生活も不安定になるが、この保険があればどうにか暮らせるという発想である。

それはすでに各地にできた家庭菜園付きセカンドハウス（クラインガルデンなど）や、オフグリッド住宅（えねこや六曜舎）にも通じる自営の暮らしに該当するだろう。また著者からヒントを得たが、例えば都心の老朽化し危険な空き家を行政が解体し、更地を近隣住民に家庭菜園として貸す。敷地が100㎡あれば10家族くらいに分けてその賃料を解体費に回し、所有者には固定資産税を減免すれば空き家対策にもなる。これならば東京などの都市部でも保険になり、まちづくりにもなるだろう。

そしてこの取り組みに近いまちづくりをしているのが、高知県の<sup>ゆすはらちよう</sup>梶原町や山形県の<sup>かねやままち</sup>金山町などの地産地消や人を呼び込む活動が盛んな地域であると思う。さらに持続地帯（sustainable zone）という「その区域におけるエネルギー需要と食料需要のすべてを賄うことができる区域」が、2020年度に90の地方自治体に増えたことは明るい兆しだろう。

## このままマネー資本主義を続けていくのか

著書で紹介されたオーストリアのバイオマステクノロジーやペレットストーブの開発、CLT製材などによる循環型社会はとても魅力的に感じた。だがこの里山資本主義の課題は脱成長に近いこと、経済の停滞がまず不安になりメジャーな経済論にならないことだ。地域コミュニティによって生活ができてビジネスにならないればサステナブルではない。おそらく私たちは固定概念から抜け出せずにマネー資本主義の社会の中で生きている。

この少子高齢化社会でインフラを含めた社会環境を誰が維持更新するのだろうか。医療、社会保障費は誰が負担するのだろうか。持続可能な社会を求めらるならば、この里山資本主義のような地域主義、スモールシティ、循環型社会への変革が必要なのではないか。私たちは東日本大震災で「変わる」なければいけなかったが、その機会を逃してここまで来た感じがある。このコロナ禍と戦争、そして気候変動が、私たちの意識、ライフスタイルを見直すことを求めていると捉えるべきではないだろうか。



# 当事者に聞く コンペの企画から完成まで

—品川区／JIA 城南地域会 座談会 前編—

2018年「JIA建築家大会2018東京」のメインイベントとして企画された、実施コンペ「大井町駅前パブリックスペース設計コンペティション」。このコンペに関わった方々にコンペ実施の裏側を振り返っていただき、4回にわたりお届けします。今号と次号では、コンペの主催者である品川区とJIA城南地域会の皆さんに、コンペの企画から実施までを語っていただきます。

## 大井町駅前コンペの記憶

2016-2020年度 関東甲信越支部長  
藤沼 傑

大井町コンペは私がJIA関東甲信越支部長として活動した中で最も引用回数が多いものとなっています。私は支部の活動方針の最重要事項として、若手の育成と支援を掲げました。JIAの会員数が減少しているだけでなく、建築家という職能そのものが存亡の危機にさらされているからです。実績が必要なプロポーザルが普及した弊害として、若手が公共建築を担う機会が少なくなりました。そのため、2018年JIA東京大会とARCASIA大会に向けて、実績を問わないコンペを実施することにしました。東京都や各区に打診したものの、ほぼ門前払いに近い状況でしたが、唯一品川区のみが興味を示してくださいました。

実績を問わない設計者を選定するのですから、JIAとしてその設計品質を担保する必要があります。そのため、実際の設計における設計レビューも業務として受けました。審査委員の千葉学氏、原田麻魚氏、武井誠氏と私が予算方針や工事積算書を検証し、価格高騰に関して第三者としての意見を品川区に提出しました。また、千葉学氏、構造設計金箱温春氏、設備設計松尾和彦氏、宍戸照二氏、相坂研介氏、近藤昇氏と私でレビューし、基本設計時は134項目、実施設計時は44項目について意見交換しました。



最優秀賞は、金子貫介(あかるい建築計画)+斎藤信吾(同)+根本友樹(無所属)(当時の「7つの塔がつむぐ都市の風景」。あらゆるジェンダーが使いやすい独立した塔状のトイレを公園内に点在させた計画。2019年7月竣工。

この計画はJRに隣接する非常に難しいものでしたが、あかるい建築計画の皆様がコンペの時の案をほぼ実現しました。この作品が実現できたのは、行政との信頼を築いてきたJIAの地域会、発注者である品川区の理解と区担当者の熱意であったと改めて実感しています。

日本財団が運営しているプロジェクトTHE TOKYO TOILETが多くのメディアに掲載されていますが、それと並んでこの大井町駅前公衆便所も必ず紹介されています。世界ですでに認知されている建築家やアーティストの作品とこの大井町のトイレが同時掲載されていることが、この事業が成功した証です。

### 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティション 概要

#### ■計画概要

大井町駅前公衆便所および大井町前公園(駐輪場、分煙コーナーなどを含む)の修景。

品川区の玄関口であるJR・東急大井町駅前にふさわしい、機能的で景観に配慮された魅力的な作品を募集する。

本設計コンペティションにおいて選出された最優秀作品の応募者を、業務委託の担当者とする。

#### ■参加資格

一級建築士事務所であること。

#### ■スケジュール(いずれも2018年)

参加表明書受付期間:6月25日(月)~7月27日(金)

提案作品受付期間:8月3日(金)~8月24日(金)

1次選定結果発表:9月4日(火)

2次選定(公開ヒアリング)および最終結果発表:

9月15日(土)(JIA建築家大会東京メイン会場である明治大学駿河台キャンパス アカデミーホールにて実施)

#### ■審査員(敬称略)

千葉 学(委員長、建築家・東京大学教授・JIA正会員)

武井 誠(建築家・JIA正会員)

原田麻魚(建築家・JIA正会員)

藤田修一(品川区防災まちづくり部長)\*当時

中村敬明(品川区都市環境部長)

#### ■主催・事務局等

主催者:品川区

担当課:品川区防災まちづくり部公園課公園建設担当

業務支援(有償業務):公益社団法人日本建築家協会(JIA)

## JIAからの打診でコンペ始動

参加者	<b>中村敏明</b>	品川区 都市環境部長
	<b>鈴木和彦</b>	品川区 都市計画課長
	<b>溝口雅之</b>	品川区 防災まちづくり部長
	<b>近藤 昇</b>	JIA城南地域会 副代表
	<b>市村宏文</b>	JIA城南地域会 / 前広報委員長



右から、品川区防災まちづくり部長 溝口雅之氏、都市環境部長 中村敏明氏、都市計画課長 鈴木和彦氏、JIA 前広報委員長 市村宏文氏、城南地域会副代表 近藤 昇氏

**市村** **JIA** コンペ実施から5年が経ちました。今回皆さんと改めてコンペのことを振り返り、記録として残すとともに、他の地域でコンペを行う際の参考になればと思っています。

**近藤** **JIA** 順に振り返ると、2018年のJIA建築家大会を東京で開催するにあたり、そのメインイベントとして設計コンペを企画できないかという話があり、藤沼傑支部長(当時)からの依頼でこの企画が実施できる自治体を探ることになりました。当時、城南地域会の宍戸照二さんが大会の実行委員だったので、2017年12月に宍戸さんと私で品川区の藤田部長(当時防災まちづくり部長)と中村部長、鈴木課長にお願いに上がりました。その時、皆さん非常に興味を示してくださり、実施できる場所を探しましょうと言ってくださいました。「公衆トイレなんかどうでしょう」とお話ししたのも覚えています。

そのあと1ヵ月も経たずに、大井町駅前の公衆便所の建て替え案件をご紹介いただきました。中村部長が「これは私が前に設計したトイレだよ」とおっしゃっていましたね。

コンペ実施が決まってからの品川区の対応はとても早かったです。どういったかたちで話が進められたのでしょうか。

**中村** **品川区** 公衆トイレをひとつ例に挙げていただきましたが、通常トイレの設計は区の職員が手掛けていましたし、最近では委託で設計をお願いするパターンが多かったので、コンペで決めるのは私にしてみれば想定外で、正直うまく実現するかどうか半信半疑でした。それでまずは公衆トイレを扱っている公園課の溝口課長(当時)に話を持っていったら、すぐに「おもしろいですね」と。公園課でも新しい試みにチャレンジしたいと考えていたということでした。正直断られると思っていたので、その反応は意外でした。

公園課で検討した結果、大井町駅前公衆便所を建て替えることが決まりましたが、近藤さんからのお話があったように、ここに建っていた公衆便所は私が設計した建物なので、不思議な縁を感じました。私は当時営繕課で、公衆便所や公園便所の建て替えは公園課から執行委任を受けて設計と工事をしていました。設計した当時は、大井町駅前の公衆便所は使用頻度が高いため耐久性が要求され、それから大井町の駅前にふさわしいデザインを希望されて設計しました。なのでそれを建て替えることに驚いたのですが、そのトイレには多目的トイレがありませんでしたし、時代の要請なのかなと思いました。そう考えると、建物の寿命は構造体そのものや設備の寿命というよりも、時代の要請の寿命もあるのかなという気

がしました。

**鈴木** **品川区** 私は前職の建築課長時代から、近藤さんや城南地域会の皆さんとお付き合いさせていただいています。建築課長時代は確認申請が主な業務ですが、品川区内には歴史や魅力ある建物がたくさんありますし、建築にもっと目を向けて発信していったほうがいいのではないかと考えていました。ましてや、区の公共建築の設計をコンペで決めたことなど記憶がなくて……。ですからコンペの話は良いお話だと思いました。公共施設ですから機能が第一ですが、それとともに街の印象に残る、顔になるようなデザイン性も発信できたらいいなと思いました。

**近藤** **JIA** 実は他の地域会も各行政に話をしていたのですが、品川区がすぐに手を挙げてくださり、しかも実施コンペを紹介してくださったので、支部の動きも活発になりました。

**中村** **品川区** 品川区の内外で日頃ご尽力いただいている建築家協会の皆さんから来た話ですし、熱意も伝わったのでなんとか実現したいという気持ちはありました。私も次第に期待が大きくなって、あとは溝口公園課長の尽力でトントン拍子に話が進んで、コンペが実現しました。

**溝口** **品川区** 本当は区内のもっと大きな建物のコンペが実施できれば良かったのかもしれませんが、公園課としては公衆便所は建てってから30年ほど経って老朽化していたり、洋式化が求められたり、建て替えなくてはならないものを課題として抱えていました。きれいに建て替えて皆に使ってもらえるようにしたいという思いがあったので、中村部長からコンペの話があった時は「ぜひ！」と言いました。建築家の方が設計することで相乗効果が生まれ、それを区民に還元できるのであれば、良い結果になるのではないかと思います。

**近藤** **JIA** あのときは東京オリンピックの前でしたね。

**溝口** **品川区** はい。もともと言われていたのは、来街者が品川区に来てトイレに困った時に、汚いトイレでおもてなしできるのかと。それは公園課長になってすぐに区長から命題としてもらっていました。ですから公園課としても大井町駅前のトイレでひとつ成果を出すことができプラスでした。

**市村** **JIA** 今は公共コンペも実績が求められることが多く、コンペ自体も以前のように数が多くはないので、このコンペは敷居を低くして、どんな人でも参加できるコンペにしたいと考えていました。なのでトイレの設計という規模は、われわれJIA側にとってもありがたいものでした。(次号に続く)



## タマビ ケンチク



中村高淑

1992年 多摩美術大学 建築科卒業

## タマビと私 (タマビ=多摩美術大学)

中高ではプロに憧れてテニス部(軟式しかなく)、市内大会で優勝し、高3の夏まで頑張るも県大会すら出られず終わった。一方、ライブハウスで演奏するなどバンド活動も行い、青春を楽しんだ。成績は悪くはなかったが部活引退後に美大予備校に通うも受験対策としては出遅れ、浪人を覚悟した。が、母親の実家近くの太宰府天満宮で「タマビに合格しますように」と絵馬を納めたご利益だろうか、現役合格。これは当時『金魂巻』という本が流行り、職業ごとにマル金・マルビに分けてイラストとともに風刺したもので、マル金のインテリアデザイナーがタマビだったことから単に憧れたのだった。実家が内装業で従兄弟が美大生だった影響も大きい。

入学すると1浪2浪が多く、現役はちと肩身が狭い。課題の両立が大変で新しく組んだバンドは抜けたが、硬式がやりたくてテニス部は続けた。しかし、ケンチクは留年率が高く、課題提出の日に寝坊し留年する。すると同級生が倍になり友達が増え、クルマやバイク通学OK、三日三晩続くド派手な<sup>ゲイサイ</sup>芸祭など、自由な校風が肌に合い、5年間に延びた学生生活を謳歌した。後の妻とは留年同期として出会う。災い転じてなんとやら、親には悪いことをしたが浪人したと思えば結果オーライか!?

## ソッセイと私 (美大では卒業設計=卒業制作、「ソッセイ」と呼ぶ)

留年して2巡目ともなると課題の評価も上がり、2年生からは先輩に誘われた設計事務所(SKM)でのバイト経験も活きて3年で最高のA評価を得る。といっても友人や後輩を総動員した結果。美大だけにみな絵が上手く、模型も器用に作る。ヘルプの数と質では学年一番だろう。

4年前期はタマビのキャンパス課題(後に実際の計画に参加)を経て、大規模施設も慣れ、優秀な後輩を番頭にヘルプ体制も準備万端、がしかし、テーマが決まらない…。当時は「社会問題から課題を抽出→ケンチクのアプローチやプログラムによる解決の提案」的な傾向はほぼなく、インターネットもコンテストも(たぶん)なく、おおらかな時代で指導教員も放任主義だった(気がする)。興味のある住宅分野でテーマを考えたが、ソッセイレベルになりそうになく時間切れ、別案の施設計画



卒業制作「本田宗一郎記念館」の図面(ごく一部)と模型

に切り替えた。まあ、次善の策である。

敷地は地元浜松、観光地でもある浜名湖のほとりに郷土の偉人・本田宗一郎の記念館を計画した。ホンダは僕の初バイク。他にヤマハやスズキ、トヨタの関連企業が集まるメッカであるが、ことモータースポーツの文化面では弱い。そこで博物館+体験コースからなる複合施設によって「見て触れて楽しむ→文化を育む」ことを考えた。

## イマの私

図面がA1で20枚と模型2つをヘルプ総勢10余名、何日も徹夜しながら、時間ギリギリに提出した。結果はB評価。講評会は熱量だけは褒められたが、可もなく不可もなく、だったのだろう、ほぼ覚えていない。ただ、やり切った充実感と達成感があった。

卒業直後に店舗併用した実家を自営で設計施工。竣工後はタマビの田淵諭教授の事務所でタマビOBの兄弟子らと約7年修行を重ね、うち半分をタマビのキャンパス計画に従事。一級建築士となり独立、初の依頼はタマビテニス部後輩の家。雑誌に掲載され依頼が増えたが、ケンチク同期や職員や紹介など、タマビがご縁のことも多い。

ソッセイは卒業を目的にした感が否めないが、卒業ができて実によかった(笑)。タマビが公私にわたり大きな影響与えた。タマビの講評会は全員が発表を行い、計画の出来が悪いと公開処刑のような雰囲気であったが、振り返るとこれが実によかった。「なんで?」という問いに「なんとなく…」、なんて返した日には、ミソカスにやられたものだ(アカハラじゃないですよ!)

そして、ケンチクを考えるにあたり、今も自問自答している。「なんで?」と。

# 「吠える」ことの重さ



左 知子

JIA設立の頃に関東甲信越支部には「会員委員会」という委員会があった。その後の組織再編で支部総務委員会に吸収されてしまったが、そこでは入退会の審査を行い、さらに会員の親睦・交流を企画していた。会員委員会の委員になったことが、私のJIA活動の実質的なキックオフだったといえる。

新会員の集いは、毎年、その年の新入会員を集めて行う、オリエンテーションの場として設けられていたが、ある年の新会員の集いに故大谷幸夫氏を招き、新入会員と共にその声に耳を傾ける機会があった。建築家会館の1階ホールの中央に立たれた大谷先生がおっしゃったことは、「建築家は、権力に媚びてはいけぬ。吠え続けているといけぬのです」という、激しい言葉だった。すでに健康を害されており、軽食を口にすることもなく、若い人たちの声に耳を傾げるために立ち続けていた姿がしっかりと思い出される。当時、私はまだ若く、晴嵐の思いを胸に抱いていた頃で、風が吹いても倒れそうな風貌から激しい魂のオーラを感銘をもって受けとめた。丹下健三氏が1万人の会員による圧力団体としてJIAへの結集を提唱したことは、単に1万人の数合わせばかりが提唱されたかに聞こえていたが、実は根は同じところだったかもしれない。この「吠える」という言葉だけがその後の日常の情景の中でも去来する。「吠える」とは何を示唆されたのか？と時間を越えた現在も思う。

議論する場が減り、もっぱら情報交換が主となっているのはコロナによるリモート会議の運用のためだろうか。方法論の議論はあっても、そもそもの議論が乏しいと感じてきた。不思議に思うのは、組織の内部では、年々会員相互はフラットな関係になってきていると感じられるのに、議論が希薄になってきているのはなぜだろうか。高齢化も一因ありそうだが、議論のなくなってよい理由は見当たらない。建築家の社会的地位もいつか理解してもらえる日が来るのだろうか。新しい建物のパンフレットに設計者が紹介されることは相変わらず珍しいことだ。建築家は、公共にとっていまだに業者と呼ばれている存在だ。この国の政策は、文化・科学には冷遇を強いてき

ており、経済効率が優先されると国民を洗脳してきている。

この会のいうところの社会貢献は何を目指しているのだろうか。例えば、会に設けられているいくつかの表彰の趣旨は、他会のそれと何が違うのだろうか？日本建築家協会の新人賞と他会の新人賞と何が違うのか？

数週間前、日本建築学会文化賞を女優が受賞したと発表された。吉阪隆正氏のヴィラ・クウクウを買い取り、手を加えて住み続けているというのが評価された。あの保守的な建築学会が！と驚きもあったが、素晴らしい受賞だと思えた。建築家が建築家に賞を出す以上に価値があるだろう。賞を受けた女優もしかるべきだが、この賞を作った学会を称賛したい。「賞」はその会の最もテーマたるべき部分の凝縮であるから、こうした独自の姿勢の表出は素晴らしいと思う。社会貢献というのはこういったインテリジェンスの蓄積の上に成り立つのだろう。

建築関連の別団体のトップに近い方から直接言われた言葉がある。「自分たちと異なり、JIAは国が作った組織ではないので、しがらみがない分、自由で何でも言える立場だ。自分たちの組織の分までも声を上げてほしいと思っている」。後ろ盾のない分、国に嫌われないように自己調整しながらの活動運営が実態だと知っているの嫌みの発言ではないと、思いたい。

JIAは職能団体ではあるが、建築家倫理をうたった組織でもある。会員個人の活動を評価主張する以上に、社会に発信し続けることが会の倫<sup>みち</sup>なのだと思います。その発信行為の重さを感じて身震いし、自己規制が働いてしまう。「吠える」につながる一步の行為が退化してしまう。私たちは、この組織のなかで、多くの素晴らしい建築家に出会い、溢れる情熱にも触れてきた。それが個人相互の業績評価に終わることなく、社会に活かされる組織であってほしい。未来を手繰り寄せるために必要なこととして「吠える」会であってほしい。

いつの間にか物わかりの良い建築家であろうとしていた自分の晩年の懺悔として、吠える行為の足固めに残された時間を費やしたい。



第34回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2023

# 地域の中の建築家～小さな物語のはじまり

開催日：2023年3月10日(金)～3月12日(日)  
会場：鎌倉芸術館(オンライン併用)

シンポジウム・基調講演

## タウンアーキテクトの可能性

神奈川地域会代表  
柳澤 潤



2022年、JIA 神奈川(神奈川地域会)は「タウンアーキテクト」を新たなテーマに掲げ活動を進めてきました。より良い社会環境、持続的なコミュニティ、そして建築家の職能と地域との関わりがこれからの建築家像に求められる、という地域会の方針に基づき、地域で活動する建築家や活動家にまち歩きのご案内をお願いしました。一例として、PEAK STUDIOの藤木俊大氏、佐治卓氏、佐屋香織氏から工業などに携わる人々と都心へ通う人々が共存する武蔵新城の「新城テラス」について、YONG architecture studioの永田賢一郎氏からは横浜の都心の足元に位置する藤棚商店街にある「藤棚デパートメント」についてなど、各地域で活動される「タウンアーキテクト」の仕事ぶりを考察しました。

2022年度のまとめとして「かながわ建築祭 2023 シンポジウム・タウンアーキテクトの可能性」では『裸の建築家：タウンアーキテクト論序説』の著者の布野修司氏

に基調講演をお願いし、制度や大学など組織形成と地域活動のほか、防災や景観など建築家の担う役割を熱く語っていただきました。このことにより制度とタウンアーキテクトの関連が明確になったかと思えます。

さらにシンポジウムには若手建築家を招き、地域で活動する建築家のその効果、地元密着型の建築が担う役割や効果など、タウンアーキテクトの可能性を感じることができました。

2022年度は、シンポジウムや建築祭での卒業設計コンクールの公開審査をJIA 神奈川独自にオンラインで配信することができたこと、また横浜市と共催でのこども空間ワークショップの開催など、JIA 神奈川としての進化を感じる年であったことを追記したいと思います。



シンポジウム・基調講演「タウンアーキテクトの可能性」より

展示

## タウンアーキテクト展

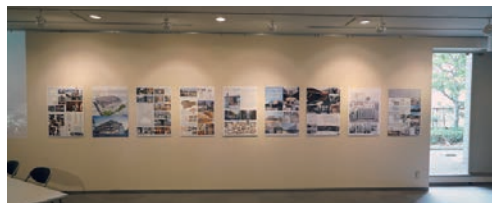
神奈川地域会  
田井幹夫



建築祭の期間中、鎌倉芸術館の1階ギャラリーで「タウンアーキテクト展」を実施しました。実は立場上出展を義務化されていた私自身、このテーマに即した発表ができるか不安で、無理くり大学研究室でのまちづくりの実践をまとめました。しかしその不安はどこへやら、予想を上回る40点ほどのパネルが集まり、実に多様な「タウンアーキテクト」像を示してくれました。

王道である「エリアリノベーション」的な活動から「単体建築」に至るまで、実にさまざまなプロジェクトが、それぞれの建築家自身が「タウンアーキテクト」の立場

として活動していることを示していました。建築家というのは町医者のように隣人としての市民を思い、その環境全てに思いを馳せ、どこかで空間的な処方箋を持って自身の属するまち(タウン)のために日夜努力する存在です。皆がそれを実践しています。地域を面的に考えている人もいれば、巨大な公共建築にその思いを封じ込める人も、本当に小さな小屋から始める人も。そんな多種多様な攻め方を持ちながら、建築家倫理に基づき実践している仲間たちがいる。そのような清潔潔白なる思いに立ち返らせてくれた、嬉しくなる展覧会でした。



展示風景

(写真: 生熊智 Techni Staff)

公開審査・展示

## 神奈川県7大学1専門学校 卒業設計コンクール

神奈川地域会  
伊藤立平



### 共感可能性へ開かれた設計を目指して

「かながわ建築祭2023」に併せて「神奈川県7大学1専門学校 卒業設計コンクール」が開催された。神奈川県下で学ぶ学生たちによる25の作品が3月10日から12日まで鎌倉芸術館のギャラリーに並び、来場者を楽しませた。

最終日の12日、福島加津也審査委員長をはじめ木村吉成・神田篤宏・佐野もも・西澤徹夫(敬称略)、審査員計5名の建築家による審査が行われた。午前には作品を巡りながらの審査によって13作品が選ばれたのち、午後に審査会場に場を移して2次審査が開始された。各作品のプレゼンテーションからは、学生たちの熱意と緊張が同時に伝わってきた。

プレゼン終了後、福島審査委員長から審査員の建築家へ、卒業設計の立ち位置について感じることに本審査での評価基準の関係が問われ、以下のような評価軸が提示された(以下、敬称略)。

**木村** 大きな問題の解決ではなく、小さな個人的疑問からの問題解消という辿り方を肯定的に捉える。その上で、設計の手法や建築家の立ち位置を更新する可能性があるか。

**神田** 設計に入り込む他者性への射程の取り方、自分の中に存在する他者性を包括していく方法を取れているか。

**佐野** やさしい建築ではなく、経験を超えた構築ができていくか。

**西澤** 卒業設計には型がある。原稿用紙の中で何を書くかではなく、どのような原稿用紙をつくられているか。前提の変化を視野に入れた新たな建築の作り方ができているか。

**福島** 過去と異なり成熟した社会の中での卒業設計は難しい。架構(構造)など社会が着目する事柄への気づきがあるか。形態の決定要因に意識が向けられているか。

上記の評価軸により投票が行われ、入賞作が決定した。



神奈川県7大学1専門学校、合計25作品のパネルと模型が並び



審査会の様子

### ●入賞作品

羽賀優希さん(慶応義塾大学) **金賞**「まちの色採り」

大橋真色さん(明治大学) **銀賞**「Remix」

境野廉さん(横浜国立大学) **銅賞**「オレンジリー空間による新しい公共」

寺山宇洋さん(関東学院大学) **福島賞**「継ぎ描く暮らしの表象」

梅澤達紀さん(神奈川大学) **木村賞**「一休集伝器」

河野奏太さん(横浜国立大学) **コンマ賞**「登り眺め、琵琶湖を想う」

神田柚花さん(横浜国立大学) **西澤賞**「彼女が彼女らしく生きられるまち」

誌面の都合上、金賞の作品についてのみ触れるが、羽賀作品では「建築家が仕事の対象とする空間の広がり(佐野・西澤)」が議論となり、「クレヨンという身の回りのもの(木村)」による「フォーマット(神田)」により、「誰でも参加可能であるオープンソースな状態の中で教科書通りの計画学ではない計画の方法に向けて格闘している(西澤)」点が評価された。「地域＝公共性と人の個性＝個別性、が意図せずに浮かび上がる(神田)」状態をつくり出せるのではないか。公共性を生むという意味で「建物だけでは片手落ち(神田)」である「状態の穴を埋める(福島)」ことができるのではないかと、といった論点で各審査員の白熱した議論が交わされた。

今回の審査の中では、「卒業設計の型(かた)への自覚(西澤・佐野)」、「設計を自分事として引き受ける個人的な切実さ(木村・西澤)」、「他者性の包括・経験を超えたところでの構築(神田・佐野)」が論点となっていたと思う。その中で、自分事ならではの具体的な手順を辿りながら「形態を超えた仕組みへの踏み込み(福島)」がプレゼンテーションの形で表れている作品が、今回の入賞作品となった。

総評の中で、福島委員長から「これは単位のつく学校の課題ではない。自主的に応募している。肉声で、相手の心に深くリーチしなければ」との言葉があった。建築設計が社会の中での共感可能性へ開かれたものとする場合、講評の中で交わされた議論は学校の外側へと歩みを進める一歩だと思う。これからもこのコンクールが、今後設計者として自立していく学生たちにとって、重要な経験の一段階であり続けたい。



## かながわ・けんちく・アカデミー 2022 「タウンアーキテクトを求めて」

「かながわ・けんちく・アカデミー2022」では、「タウンアーキテクトを求めて」をテーマに、年間を通してレクチャーや見学会を実施し、“地元に未来を託す建築家像のあり方”を学んでいます。第1回（『Bulletin』2022秋号掲載）に続き、第2回、第3回、第4回の様子をレポートします。

## 第2回

## ケーススタディ vol.3 ニシイケバレイ

アーキテクト思考による漸進的实践

神奈川地域会  
佐屋香織



2022年11月19日に開催された、かながわ・けんちく・アカデミー2022は、ケーススタディ vol.3として、東京都豊島区西池袋に展開する「ニシイケバレイ」を題材とし、設計者の須藤剛さんによるレクチャーと見学を行いました。

「ニシイケバレイ」は、地元オーナーが所有する建築とその街区と接道する私道とが、入り混じりながらつくり出す面的な広がりで構成され、高層建築の狭間に取り残されたような低密度な住宅エリアです。須藤さんは、オーナーの所有するいくつかの建築を改修し、住宅を拡張する機能（カフェやシェアキッチンやシェアオフィス等）を挿入し、それらを自走させることで、生活圏を生成しています。直接的に街に関わりがないようなマンション高層部の住人も、この場所を選択するインセンティブを得られる、エリアとしての新しい変化が起きていました。グランドプランではない、ささやかな操作の集積による街への影響に、さまざまな可能性が感じられました。



築70年以上の木造平屋を改修したカフェ。スチールのフレームが庭を覆い、新たな領域をつくり出している

木賃アパートを改修した店舗。2階はシェアオフィス。私道を活かしたアプローチとなっている

## 第3回

ケーススタディ vol.4 柏の葉  
& vol.5 西千葉

神奈川地域会  
清水智津子



2022年12月10日千葉県に赴き、1日かけて柏市に展開する「公民学連携のまちづくり」と千葉市西千葉に展開する「地域の方と一緒に場をつくり、つながりをつくることで進めるまちづくり」と異なる視点でのまちづくりに焦点をあてて、レクチャーと見学会を行いました。

柏市は、公は担当が代わるなど長期にわたるまちづくりが難しいという弱点を、民の推進力と学の知見や継続性を連携させたことでできる公共空間がありました。西千葉のまちづくりは、建物ありきではなく何を必要としているのかというところからまちに問い、更地が地域の広場になり、地域の発信基地となっていました。どのように地域と寄り添っていくか、さまざまな方法があり正解はありませんが、まちづくりは体感してわかることが多いと感じました。



柏の葉  
人が立ち入れない調整池をパブリックなオープンスペースへと改修した2号調整池



西千葉  
民地を活用した屋外の公共空間  
HELLO GARDEN

## 第4回

## ケーススタディ vol.6 鎌倉

まち歩きから始まる鎌倉のまちづくり

神奈川地域会副代表  
田邊雄之

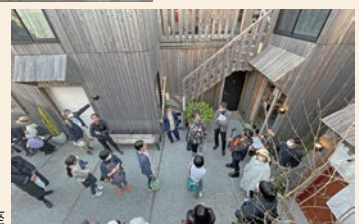


かながわ建築祭期間中の3月11日に、鎌倉にてまち歩きを開催。案内は景観的な観点でまちづくりをサポートしている（一社）ひと・まち・鎌倉ネットワークのメンバー。まち歩きに先立ち代表の波多周氏より、これまでの活動や景観についてのレクチャーがあった。参加人数は43名（ひとまちメンバー、JIA役員、一般）。ルートは若宮大路中心部からスタートし鶴岡八幡宮へ、古いまちなみが残る路地を通して鎌倉駅周辺を散策、由比ガ浜通りを西に進み長谷駅で解散というもの。建物は新旧（重要文化財、登録有形文化財、景観重要建築物含む）合わせて45軒で、主に外観からの見学。新しいものは今年度

の地域会のテーマでもある「タウンアーキテクト」にちなんだものや、まちに開かれた建物が選定された。



寸松堂  
(景観重要建築物)



鎌倉笹目座

## 思考の空間に跳ぶ



大山早嗣

建築家の職能とは何か？さほど長いとは思わない自身の履歴を辿りながら紐解いてみたい。

大学を卒業してからの活動拠点は生まれ育った茨城である。大学を卒業したのは1991年、仕事を早く覚えたいという一心で水戸の建築設計事務所に入所した。実務の面ではここでの経験がその後のキャリアを支えることになる。「茨城県窯業指導所」（現 陶芸大学校）と「笠間工芸の丘」は共に笠間芸術の森公園に隣接した建築であるが、約6年間この2つの建築に没頭していた。窯業指導所は文字通り窯業に関する試験研究、笠間工芸の丘は笠間焼の展示販売、体験という機能を担っている。ここではセラミックス（笠間焼を含む窯業製品）と稲田石という素材について、建築材料としての可能性をあらゆる視点から探ることになった。通常は廃棄される端材の再利用やPCの骨材利用などは、今でも応用の利く経験となっている。笠間の丘陵地帯は阿武隈山系の一部でもあり、筑波山はその南端に位置する。敷地を読むという意味では、風化花崗岩が露出する丘陵地形との対話もかれこれ長い付き合いになる。

偶然と選択の重なりからキャリアの初期に笠間という地に関わることになるわけだが、それ以降携わった設計活動を振り返っても、その土地固有の特性やゼニウス・ロキ（地歴・地霊）という空間認識概念を常に意識していることに変わりはない。その土地に降り立ち、その土地の匂いを身体に入れ、自分の眼と耳であらゆる情報にアクセスすることを繰り返す。建築家の職能はそこから全て始まると言っても過言ではない。建築が地理的にそして物理的に存在する以上、私たちは世界のどこにでも飛び、そして思考の空間に跳ぶのである。

少し話を戻そう。建築家として独立することとは何か、私にとっては自由になることだった。資格を取得して建築士事務所を開設するまでの2年間、フリー（＝個人活動）の期間があったと言えば聞こえが良いが、いわゆる無職の時期があった。建築設計事務所という小さいながらも1つの組織から離れたきっかけは、自分を相対化し導き出した結果でもあるが、この間に自身にとっては大きな経験を積むことになる。その1つが1998年か

ら1999年にかけて石山修武氏が主宰したスクール、A3ワークショップへの参加。A3は職人（Artisan）・芸術家（Artist）・建築家（Architect）の頭文字であり、このワークショップは次のような意味を持っていた。「設計事務所でもデザイン会社でもなく、また、従来の大学教育の枠内にとどまることもなく、自由な主体の連合で、モノづくりを成し遂げてゆく理想に向かっての運動」。この場には文字通り自由な主体が集い、連日連夜レクチャーと創作、クリティークが繰り返された。つくるといことはどういうことなのか、それまでの思考を大きく揺さぶられたことを今でも鮮明に覚えている。設計とは、思考した空間やものを共通言語で図面化することもその1つ、言葉のみで表現することもその1つと言える。もしかすると今でもこの運動を続けているのかもしれない。

独立してからは、もちろん生きていくためではあるがさまざまな建築に携わった。日本各地の店舗や商店街のリノベーションを行いながら仲間と実店舗を構えたことや、柄谷行人氏が提唱し立ち上げたNAM（New Associational Movement）という社会運動体の中に身を置き、建築生産システムなどについて議論を重ねたこともあった。そのような中でも自由に跳ぶことを忘れずにやってきた。現在、かつての自分と同じ30歳前後の仲間に建築や社会に対する思いを伝え続けながら活動している。そして25年の時間を経て再び笠間の地に立っている。



陶芸大学校と遠方の山々～笠間工芸の丘より



## 必要とされる建築、 必要とされない 建築家

松本秀樹



建築家に憧れ、その道に進み、25年以上の歳月が過ぎた。その間、いろいろな建築家に出会い刺激を受け、建築を見て感動したりしてきた。一方で「建築家」という職能は将来的に生き残れる職能なのだろうかと考えることが多くなった。それは、社会に問いかける「建築家」が社会性をもち合わせていないのではないかと感じることも多くあったことが大きい。

他者のお金を使いながら自分の思考を達成することが優先され、不具合が起きたときには責任を取れないという状態、建築家の立場のなさに、社会は「建築家に仕事を頼みたくない」「設計には安い費用しか払わない」といったことにつながってしまったように感じたからだ。今も建築は環境や社会を変える手立てとして役に立っていると思う。一方で、建築家は徐々に社会から排除されつつあるように感じてならない。

そういった気持ちを持ちながら完成させた「エルピザの里」は、使い手に対して真摯に向き合いながら進めてきた。建築も単に意匠のためのディテールではなく、安心して安全に使い続けられるよう、考え取り組んできた。利用されてから2年近く経ち、利用者はこれまでにない豊かな生活を確保し、発生した不具合には真摯に向き合い対応してきたことで施主も喜んでくれている。そして、いくつかの賞も受賞し「作品」まで昇華できたと感じている。私は今、建築家として活動しているが、「建築家」が社会に必要とされる価値の高い職能となるよう、これからも社会への責任を持ちながら活動を続けていきたいと考えている。



知的障がい者生活施設  
「エルピザの里」

## 滑走から飛翔へ

田村克己



国の統計によると、昨年度の東京都の新設住宅着工戸数は約134,000戸です。東京都の一級建築士事務所登録数は約13,000社あまりなので、大雑把ではありますが、これを各社に均等に割り振ると、1社に約10戸あまりとなります。しかし、このほとんどは、ハウスメーカーやホームビルダーが設計施工しており、専門の意匠設計事務所が直接受注して設計した住宅は、ほんの一握りかと思えます。

とある住宅相談サイトのアンケートによると、「注文住宅を建てるにあたり、まずは誰に相談したか？何を参考にしたか？」では、1位が「住宅展示場に行った」、2位が「ハウスメーカーやホームビルダーに相談した」、3位が「Webサイトで検索した」、そして、「建築士に相談した」は8位でした。建築家という文字はなかなか見当たりません。

30、40代の平均年収の方でも、理想の注文住宅をじっくり時間をかけて建てられるゆとりと多様性のある社会が本来は望ましいと思うのですが、多くの方は住まいのことを考える時間や労力を必要とは思いつつも、依頼先の選定に時間を割かれるなら、安全パイと思われるハウスメーカーやホームビルダーを選択しているのが現状のようです。特にこだわりがなく、ある程度満足できればよいと思っている方には、その方がよいのかもしれない。ある意味、このご時世を反映しているのだと思います。

わずか20、30年ほど前までは、町場の工務店も注文住宅を多く手掛けていましたが、現在は少なくなったと実感します。同時に技のある大工さんも減少し、それを見越して、すでに形成されている大量生産品を部材の一部に採用してしまう自分があります。

これからの建築家は独自性を持ち、ますます器用に立ち回らなければいけない状況だと思いますが、武士は食わねど高楊枝的な部分も必要ではないかと思えます。お金儲けよりも、ただ設計が好きだからやっている職能としての建築家が存続し、徐々に増えていける社会環境になるようにしたいと思う次第です。

# アーバントリップに参加して

—前編：東山旧岸邸、とらや工房—



k/o design studio  
押野見邦英

「日本のこころに遊ぶ」というテーマのアーバントリップ実行委員会主催のツアーに会員外として参加させていただき、有意義な1日を過ごさせていただいた。以前手掛けた洗足学園のキャンパスへのツアーを案内したご縁があり、声をかけていただいたようだ。今回の4つの見学対象は初見の建築ばかりで、御殿場近郊のロケーションを反映してか、全て屋根があり、かつそれらが1950～60年と2007～12年と半世紀が隔てられ、何かしらツアーの企画者の方々の密かな企みのようなものを感じて大いに感心をそそられた。

## 「東山旧岸邸」吉田五十八／1969年

御殿場の雑木林の中に建つ、吉田五十八最晩年の作品。しかも施主は日本の戦前と戦後を通じて保守政治の首領であった岸信介で、岸が晩年を過ごした館であったとなれば、建築家でなくても興味を持たれるらしく、今回の見学対象となっている「とらや工房」にも隣接しているので、文化財としても公開され人気を集めていた。

吉田五十八は、和との関わりが濃厚な同時期の堀口捨己や谷口吉郎、村野藤吾と比べて、氏の「日本建築は凍れる長唄」という言葉が象徴する、伝統芸能の香りの強い建築は、正直言って少し遠い存在に感じられていた。

他の建築家がヨーロッパの20世紀初頭のゼセッションやインターナショナルスタイル等の建築を目の当たりにして、それらのモダニズム思想と対峙しつつ、逡巡して自らの建築スタイルを確立していったのと比べて、1925年にヨーロッパと米国を巡った後の吉田五十八の「私なりに新しい形式の数寄屋を建ててみたい」とする潔い割り切りが、その後の建築に反映されていった様子がこの建築にも窺える。

例えば吉田五十八の1930年代の「杵屋六左衛門別邸」



東山旧岸邸にて水澤工務店、川嶋常務の説明を受ける

や「吉屋信子邸」「岩波茂雄別邸」他は、同時期の堀口捨己の有名な「岡田邸」のような和洋の相剋のような劇的なところは全く見られず、戦後に至るまで時

代の要請とも折り合いをつけつつ、住宅以外の大規模建築にも応用可能な近代数寄屋としてのスタイルを確立してきたことが「東山旧岸邸」には色濃く反映している。

林の中に建つ2階建ての建築は規模も大きく、木であれば民家調にならざるを得ないところを大壁として柱表現を制御し、大壁の中で新たなアルミサッシュや網戸や雨戸等を納めて見せた腕前は流石だし、欄間の吊束を細い綱棒として欄間の障子枠の中に隠してスッキリと見せた吉田五十八の引き算のデザインは、極めて今日的である。

今回はこうした大工の熟練を要する仕事について、水澤工務店の施工担当から直接説明を受けたのも得難い経験だった。さらに後日、同時期の成城の「猪俣邸」(1967年)を見学し、吉田五十八の屋根にこだわる設計手法の理解が深まった。

## 「とらや工房」内藤廣／2008年

見学方々、テラスでお茶をいただきながら、美しい杉の集成材によるシザーストラスを見上げて、内藤さんの出世作となった鳥羽の「海の博物館」



とらや工房

の展示棟を思い出した。「海の博物館」は船底を仰ぎ見るような重量感があったが、今回のトラスが軽やかに見えるのは、柱と桁梁がスチールで側面が完全にオープンなため、まるで茶店の軒先のベンチに腰掛けてお茶をいただくような開放感が感じられた。

特に注目されるのはキャノピーの回廊部分の杉垂木と十字の鉄骨柱の繊細な取り合わせで、鉄骨が木の細やかさを少しも損なうことなく一体に見えるようにデザインされていて、そうした手法は最近の「京都鳩居堂」まで踏襲されているのが改めて分かった。

こうした木と鉄の扱いについて考えてみると、時代は隔たるものの、先の吉田五十八はそうした鉄をあくまで下地として隠す一方、内藤さんは素材として分け隔てなく表現し、異素材を巧みに使いこなしているのが対照的だ。

(次号に続く)



## 交流委員会 Aグループ

## 建物見学会開催

—旅と想像／創造—



交流委員会  
Aグループ  
日本ヒューム  
木村 聡

私事ではありますが、入社後の配属で名古屋へ赴任し17年が経ち、一昨年コロナ禍に東京へ異動となり、今年入社20年目を迎えました。在宅勤務やリモートワークなど新たな営業の取り組みにも慣れ、効率よく仕事ができる環境にもなりました。

東京へ来て本会賛助会員の担当を引き継ぐこととなり、不安と緊張しかありませんでしたが、Aグループの皆様にご温かく迎え入れていただき感謝しております。Aグループは建築基礎関係を扱う同業者も多く、関東に不慣れな私としては有難く勉強させていただいています。

## 建物見学会

Aグループでは毎月1回の定例会を各社持ち回りで行っており、弊社担当の回に建物見学会を開催することになりました。築地本願寺や旧前田家本邸、角川武蔵野ミュージアムなど魅力的な候補地がありましたが、今回は港区白金台にある「東京都庭園美術館」へ伺いました。

東京都庭園美術館は、昭和8(1933)年に朝香宮邸として建てられ、昭和58(1983)年にアール・デコ様式の建物の空間を生かし、緑豊かな庭園が調和した美術館として開館しました。平成26(2014)年には新館が完成し、翌年には本館・正門・茶室などが国の重要文化財に指定されています。

建物は、宮家の第八王子が陸軍勤務中に軍事研究のため渡仏し、長期滞在したことにより、当時のアールデコ

様式に触れ、魅せられ、自邸の設計に取り入れることになったそうです。自邸とはいえ、朝香宮家と日仏デザイナーの総力を挙げた芸術作品となりました。

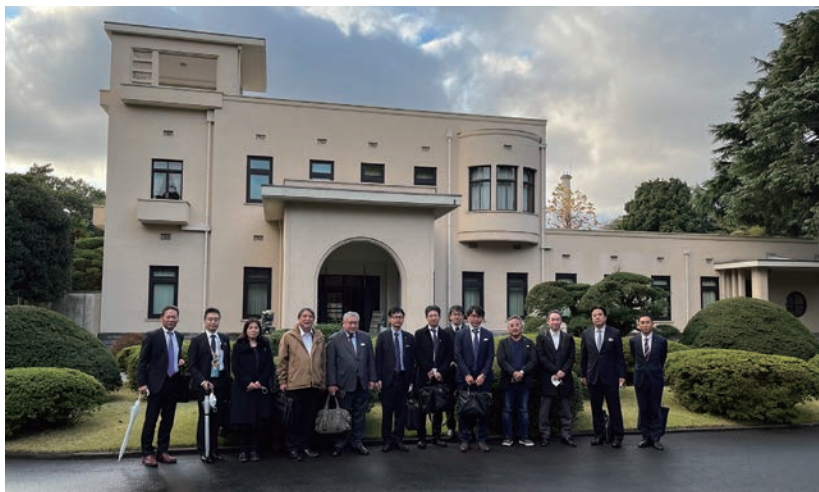
アール・デコ(直線的なデザイン)やアールヌーボー(曲線的なデザイン)については調べていくと興味深く、自宅のインテリアにも取り入れてみたくなりました。

さて、美術館見学会に話を戻しますと、見学日の11月15日には展覧会「旅と想像／創造～いつかあなたの旅になる」が開催されていました。コロナ禍で移動の自由が制限された2年半あまり、世界中で旅を諦めた人も多くいたことでしょう。「旅」とは何か、そこに潜む物語は旅人のものだけでなく受け取る相手にも共有され、経験されるものです。

近場の旅でも遠出する旅でも積極的に外に出て見聞を広め、家族や友達などと共有することで想像を膨らませ、新しい旅を切り開く一歩を踏み出していきたいと感じました。

## あとがき

港区白金台、最寄り駅の日黒駅は都心の一等地ですが、いつもとは違うその広大で閑静な世界を出て、懇親会場はお値打ちな中華料理と見慣れた世界になりました。小雨の降る中、見学会参加者のほぼ全員に参加していただき、楽しいひと時を過ごせたこと、この場を借りて御礼申し上げます。



「東京都庭園美術館」の前で

## 交流委員会 Fグループ

## 施設見学会開催

—三建設備工業「さいたま技術センター」—



交流委員会  
Fグループ  
三建設備工業  
河合 勲

## 環境と働く人に配慮した建物づくり

交流委員会Fグループの施設見学会が3月9日(木)に開催されました。今回は、当社三建設備工業の「さいたま技術センター」にて、正会員3名、協力会員24名、合計27名に参加いただきました。

当施設は、社員研修や執務の場としての機能をただ満たすだけでなく、「今、時代が求める建物とは何か?」という問いに対し、現時点でできることを詰め込んだ建物です。与えられた課題は4つあり、①技術の継承、②多様性と変化、③安心安全、④交流促進です。さらに「経済設計」と「ZEB+α」にも挑戦しました。ZEBプランナーとしての新たな実績となる「ZEB Ready」を認証取得し、+αとして健康と知的生産性の観点を加えて評価する「CASBEE-ウェルネス」の認証取得に向けて、自然や生命を感じられる環境を取り入れたオフィスデザインである「バイオフィリックデザイン」や、仕事内容や気分に合わせて働く場所や時間を自由に選ぶ働き方「ABW (Activity Based Working)」の考え方を設計に取り入れ、「CASBEE-ウェルネス」『Sランク』(5段階評価の最高ランク)を取得しました。

バイオフィリックデザインとしては、1階から6階のあらゆる場所に植栽を配し、どの位置からも緑が視界に入るようにしました。緑は目に優しいだけでなくリラックス効果や生産性向上にもつながると言われています。また内装に木材を多用し、無機質になりがちなオフィスにぬくもりや安らぎを感じられるよう配慮し、4階と5階をつなぐ中階段は、休憩時間にここで社員がリラックスして、おしゃべりする姿を想定し、右端を一段スキップさせることで、腰掛けるのにちょうどいい作りになっています。また、社員の健康増進を図るため、エレベーターを使わずに階段の利用を促すよう、階段にカロリー消費量を表示しました。

## 設備・電気・建築の設計、施工をすべて自社で

この建物は、管工事・電気工事・建築工事を自社で一括施工し、工期短縮のために、建築施工よりも先に設備施工を行うなど、従来にはない施工手順にも挑戦しました。また、女性活躍の場を広げたいという意向から、設計・

施工管理を女性社員が中心となって進めました。さらに、研修のため、機械室の配管やダクトには、通常の識別表示に加え、配管の役目ごとに金網の色を変えて研修生が理解しやすいように工夫し、通常は隠されている壁や天井内も「設備はすべて教材。見本になる」という意識で「見える化」しています。

当施設は、社員研修および、協力会社をはじめとする社外の方の安全教育を実施しながら、交流拠点として運用していきます。さらに、周辺にお住まいの方々にもイベント等でご利用いただくなど、周辺地域に開かれた場となることを目指しています。今回の見学会では、参加者の皆さんに現場での危険な場面を疑似体験できる「安全体感訓練」(下部写真)を実際に体感してもらいました。

見学会の後、東天紅 大宮店に場所を変えて懇親会を執り行いました。コロナ前とまではいきませんが、会員の皆さんとの楽しい時間を共有することができました。今回の施設見学会・懇親会で、多くの仲間との交流を深めることができ、大変嬉しく感じています。

JIA関東甲信越支部交流委員会Fグループの活動を通じ、今後も多くの方々との交流を深めていきたいと考えております。引き続き、活動のご支援等のご協力をよろしくお願いいたします。



安全体感訓練(さいたま技術センターにて)



## 福島建築巡り

—空間構成や動線計画を体感—



学生の会 @joint  
日本大学大学院理工学  
研究科建築学専攻1年  
紫安洋平

3月30日、31日の2日間、@jointのメンバー5人で福島に建築巡りに行きました。1日目に「須賀川市民交流センター tette」と「郡山市立美術館」、2日目に「三春交流館 まほら」、環境水族館「アクアマリンふくしま」を訪れました。

1日目に行った「須賀川市民交流センター tette」は東日本大震災で甚大な被害を受けた地域の再生事業の一環として計画された施設で、中心市街地活性化の中核施設の役割を担っています。ここに来てまず驚いたのが、フロアマップの図で、とても流動的な空間がパッと見てわかるようになっていることでした。5階建ての建物の全てのフロアに交流スペースが繋がっていて、2階～4階には図書館機能が配置され、フロアごとに分断するのではなく、繋がった空間構成になっていました。この構成により吹き抜け空間が多く生まれ、1階まで自然光が入るとも気持ちの良い空間が市民活動をより豊かにして、ここに来た人々の交流も活発になるのでは、と感じました。

2日目に訪れた「アクアマリンふくしま」は日本設計が手がけた水族館です。広さが4,500㎡で水族館として東北一の大きさを誇り、魚だけでなく動物もいてさまざまな生



アクアマリンふくしま

物に触れることができます。中でも印象的だったのが広大な空間を利用した動線計画です。建物の外の道では動物を見ることができ、建物内に入ると海の生き物の歴史を感じることができ、さらに歩くと熱帯雨林地域の森林を再現した空間もあり、建物を巡りながら学びを深めることができる興味深い動線計画になっていました。

とても勉強になる建築巡りになり、これからも継続してさまざまな地域の建築を見に行きたいと思う貴重な経験になりました。

### 次世代のタマゴたち



#### 蒸留所デザインプロジェクト

学生の会 @joint 佐原志央理  
東京工芸大学工学部工学建築コース3年

私は現在、福島県川内村の空き家を活用して福島県産の規格外フルーツを使ったクラフトジンやブランデーを製造する、蒸留所のデザインプロジェクトに参加しています。何回かオンラインでイメージ共有を重ねた後、3月末には現場視察に伺いました。

蒸留所のプロジェクトを手掛けているOさんと合流すると、オープン前の古民家カフェに案内してくださいました。築200年の古民家で、店内に置かれたオーナーのお父様手作りの椅子と近所の方が置いていったというギターがよく馴染み、「ただいま」と言いたくなる空間でした。

蒸留所となる空き家を見学していると、通りすがりの軽トラがプッとクラクションを鳴らしていきます。これが



蒸留所に再生予定の  
鉄骨造2階建ての空き家

挨拶のようです。川内村は電車も通っておらず、外部からのアクセスは良いとは言えません。恥ずかしながら私は、高齢化が進み活気のない村を想像していました。しかし現場視察で目にした光景はその真逆で、若者が自由にやりたいことに挑戦し、それを村全体が支えているようでした。

私は今まで、実際に形になるプロジェクトというものに関わったことがなかったため、このお話をいただいて飛びつきました。川内村はちょうど今まちづくりの最中で、今後の発展が期待されています。その一部となる蒸留所の設計は、川内村の魅力を伝えるお手伝いができているようで、とても光栄に思います。少しでもお役に立てるよう、これからも精進してまいります。

## 広報からのお知らせ

### 退任の挨拶

## 1年を振り返って

2022年度『Bulletin』編集長  
望月厚司



2022年度の1年間『Bulletin』の編集長という大役をいただき、何もわからないまま始めてしまった2021年の11月、初めは2022年4月から就任というイメージでいしましたが、実際には2021年12月には特集のテーマを考えていかないと間に合いません。発刊は6月ですが、半年前から準備を進めていきます。2022年度の特集記事では、大枠でのテーマを「施設設計を考える」とし、夏、秋、冬、春号の4号をどのように進めていくかで悩みました。テーマが弱い、分かりにくいなどの意見もあり苦労しました。

夏号は「福祉施設」、秋号は「教育施設」、冬号は「文化芸術施設」で、春号は座談会を行う話も出しましたが、最終的に春号は「宿泊施設」を取り上げ、1年間4つの施設のカテゴリーに絞って進めてきました。日本において、人口の減少や高齢化、限界集落、過疎化などの社会背景がある中で、公共性の高い施設は今後どのようなものが求められていくのか、施設計画での建築家の役割や使命とは何かを考えていました。特集の内容としては、地域との共生・共存や、新しく建てる施設と一緒につくっていくまちづくり、既存の建物の再利用、再生などの内容にまよっていったように思います。

1年間『Bulletin』のWGメンバーに助けられ、叱咤激励され何とか4号発刊することができました。南風舎の八木さんにも助けていただきました。皆様、ありがとうございます。今号からは佐久間編集長につなぎます。よろしく願いいたします。〈芝建築設計事務所〉

### 新任の挨拶

## 一緒に考えていくこと

2023年度『Bulletin』編集長  
佐久間達也



このたび2023年度の『Bulletin』編集長を務めることになりました佐久間達也と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

『Bulletin』ではこれまで支部の会報誌としてさまざまな活動を取り上げ、多くの会員の方々に登場していただいています。これからも引き続き、会員同士をつなげる媒体として役立つことができると考えています。会報誌という性質が一般の雑誌と違い、読む・読まれるの相互関係を可能にしていますので、さまざまな切り口により今後も多くの方に執筆していただけるよう努力していきたいと思います。個人的には、執筆を依頼して承諾していただけた時はいつも有難く嬉しく思っています。これまで受けてくださった方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

また『Bulletin』ではJIA会員でない方にも声掛けして寄稿をお願いし、充実したトピックを提供できるよう努めています。編集WGは皆ボランティアでありながら、献身的に会報誌の向上に努めており、『Bulletin』はひとりひとりの知識やアイデアを束ねたチームとしての成果です。もし『Bulletin』の編集に興味を持たれたら、ぜひ編集WGにご参加ください。

ようやくコロナ禍を抜け出しつつあるものの、今は建築をつくるのが難しい時代だと思います。体験や思想を表に出し、一緒に考えていくことが大事ではないかと考えます。『Bulletin』がこれからもその一助となればと願っています。〈佐久間達也空間計画所〉

## この夏、熱くなりたいたいのものは？

- 今年の夏、今まで中止だった花火、祭りを楽しみたい。7月は隅田川花火大会、仕事の合間を縫って今年は海に潜りにも行きたいなあ。(望月)
- 毎年クーラーのもとで過ごす夏ですが、今年は地元の阿波踊りがついにまた開催。和装を纏い、あのアツイ屋台街で友と踊ります！(井筒)
- 暑さには熱さを！フィンランド式サウナにこもり、屋外の35度超の気温すらも「涼しい！」と叫びたい。(関本)
- 今年は夏を前に神田祭、三社祭をはじめ全国でお祭りが復活して日本人の気持ちも高揚いたしました。来年は山王祭を期待したいです。(立石)
- 熱いといえばサウナ！設計とリサーチに(笑)邁進します！(会田)
- コロナ禍も明けて、三浦半島のハイキングを再開しようかな。(中澤)

## 編集後記

- 学生最後の夏！今しかできない旅行や卒業旅行計画に熱中したいと思います！(長谷川)
- WBCで盛り上がりを見せた野球に燃えたい！！新球場ができたプロ野球観戦、自身のチームも甲子園(マスターズ甲子園)を目指す！！(知見)
- 夏の温泉巡りでリフレッシュ！しよう。(竹内)
- 今年もツーリングシーズンがやってきた。カワサキの新顔に先達の走りを見せるかな(笑)(小倉)
- 最近、花に興味を持ち、覚えようとしています。夏の花をいくつか知っているかというところ……これからはがんばります！(佐久間)
- 早寝早起(大塚)

編集：公益社団法人日本建築家協会  
関東甲信越支部 広報委員会

委員長：田口知子

副委員長：関本竜太

委員：望月厚司・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・井筒悠斗

編集長：佐久間達也

副編集長：望月厚司・伊藤立平

編集ワーキングメンバー：広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・吉田満・長谷川理奈・知見徹摩・立石博巳

編集・制作：南風舎

Bulletin 296 2023 夏号

発行日：令和5年6月15日

発行人：大西摩弥

発行所：公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

印刷：株式会社 コラボ(旧社名：株式会社 協進印刷)

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社)日本建築家協会(JIA) <https://www.jia.or.jp/>

・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

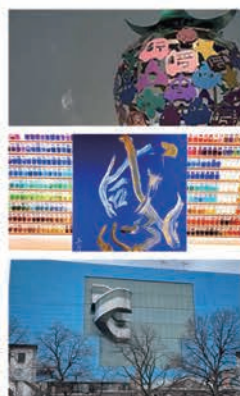
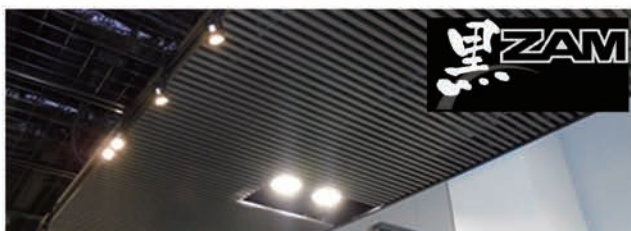
©公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2023





世界を美しく彩る  
**デザインング・メタル**

日本製鉄グループの意匠系ブランド群をご紹介します。



Make Our Earth Green

